

令和7年度教育研究自己点検評価委員会

報告書

横浜市立大学

令和7年度自己点検シート【Plan Do Check Action】 <国際教養学部>

※セルの行数、幅は変更自由です。

項目 被番	令和6年度シート転記「次年度での取組に向けて」	Plan			4 スケジュール		Do	Check	Action
		1 取組	2 課題	3 到達目標	時期	内容	5 改善に向けた具体的取組	6 成果	7 次年度の取組に向けて
A 教育	1	<p><全学共通項目> ※本欄は学部・研究科で追記等不要</p> <p>【教育の質保証・IRとの連動】 大学設置基準に基づく、厳格かつ客観的な成績評価の実施</p> <p>[参考]大学設置基準 (成績評価基準等の明示等) 第二十五条の二(略) 2 大学は、学修の成果に係る評価及び卒業の認定に当たっては、客観性及び厳格性を確保するため、学生に対してその基準をあらかじめ明示するとともに、当該基準にしたがって適切に行う。</p>		<p><全学共通項目> ※本欄は学部・研究科で追記等不要</p> <p>成績評価に著しい偏りがないか学部・研究科単位で確認し、偏りがある科目については是正の取組みがされている。なお、成績評価の確認に当たっては、GP (Grade Point) を活用する。</p>	6月	令和6年度後期科目の状況の点検	<p>・ 教学IR検討ワーキングメンバーで、国際教養学部の成績評価の分析と特徴を抽出した。 ・ その結果を学部教授会で報告ならびに改善依頼をした。</p>	<p>国際総合科学群・医学群それぞれのIRで成績評価の実施状況を分析・確認 ※教学IRにて作成する実施報告書を参照するため本欄は記入不要</p>	<p>以下の改善点の抽出ならびに取組をまとめた。 ・ あいまいな成績評価基準をシラバスにおいてより明確に示すことよって、主観的に厳しくなっている評価を客観的なものに改善できるかの検討を依頼する。 ・ 「可」に著しく偏っている科目の場合、学生の水準に見合った授業内容や評価方法を工夫する必要性を依頼すること。 ・ 「秀」の割合を受講者数の30%以下にする依頼。</p>
10月	令和7年度前期科目の状況の点検								
A 教育	2	<p>【教育の質向上】 ・ 学生による目標設定と、教員による評価の実施ならびに可視化することにより、客観的に捉え、一層の学習の質の向上を目指す。 ・ 科目毎の成績評価の乖離をなくし、標準化を図る。 ・ 教員のコメント等の入力率を向上させる。</p>	<p>・ YCU BOARDの機能が十分に活用されていない。 ・ 特定の科目に成績評価の偏在性がみられる。科目群や学系に応じて、大幅に異なる。特に、学系間の卒業時におけるGPAの相違がみられる。 ・ 教員によるフィードバックやコメントの記入が少ない。</p>	<p>・ 今年度よりYCU BOARDの運用変更を踏まえ、目標記入率80%、振り返り記入率50%を目標とする。 ・ 成績評価について、履修者20名以上をこえる科目についてS評価の割合20%以下とする。</p>	4月	オリエンテーション時にYCU Board目標記入の時間を確保ならびに指導。	<p>・ 年度当初のオリエンテーション時にYCU BOARD目標記入の時間を確保し、記入依頼をした。 ・ YCU BOARDの活用に関して、その現状と活用により期待される効果を説明した上で、学部教授会で依頼した。 ・ 成績評価におけるS評価の割合に関して、関係者で協議し、学部教授会で説明および依頼した。 ・ 教員のコメントや入力率の調査をした。</p>	<p>・ 学生の記入率は平均58%である。内訳は1年生90.9%、2年生71%、3年生50.9%、4年生27.1%である。教員の入力率は14.6%である。目標設定へのコメント数は327件である。 ・ 学生の目標記入率と教員の振り返り記入率を調べるための詳細な調査を行った。 ・ YCU BOARDは今後の有効かつ活用を目指す。他方、今後、YCUBoardからYCU Portalへの一元化されるので、その準備をする。</p>	<p>・ S評価の割合を30%以下に下げただけではなく、科目に応じて「良」「可」が多い科目が見られた。成績評価に関して、適切な評価を弾き続け検討する。 ・ YCU BOARDは今後の有効かつ活用を目指す。他方、今後、YCUBoardからYCU Portalへの一元化されるので、その準備をする。</p>
C 特色出し	1	<p>・ 2027年度に予定されるカリキュラム再編をめざし、カリキュラムの特色出しについて検討を行う。 ・ カリキュラム再編に合わせて、人文社会系のデータサイエンス教育のあり方について引き続き検討を続ける。</p> <p>【特色を出す取組】 ・ 学部改組に伴う学部再編WGのメンバーの刷新ならびに検討。 ・ 国際教養学部の教育体系に、データサイエンス教育ならびに「ウェルビーイング」への貢献を検討。 ・ 2027年度に国際教養学部と他学部との連携を強く実施できるように取り組む。</p>	<p>・ 学部の現状維持は難しい。 ・ 教育内容を学部だけを対象にするのではなく、大学全体や現代社会のニーズに適切しているかを検討。 ・ 他学部との連携が弱い。</p>	<p>・ 学部改組後の国際教養学部の特色の明示、カリキュラム表の作成等の教育体制の準備。 ・ 他学部との連携や大学全体における国際教養学部の検討。</p>	4月	学部再編WGメンバーの刷新	<p>・ 4月にカリキュラム再編WGのメンバーを刷新し、各分野にわたる中堅・若手教員を多数起用した。 ・ 現在の国際教養学部の現状と課題そして今後の社会を考慮した上で、本学部の目指す方向性を何度も検討した。その過程で理事長・学長・経営審議会の方へのご説明とコメントを賜り、それに基づき何度も学部構想を検討した。 ・ DS学部の関係者と相談し、両学部で必要なそれぞれの一部の科目を、履修可能となるように協議した。</p>	<p>・ 2027年度に向けた学部構想案が定まった。それは、学長をはじめ、多数の方連からのコメントに基づいた案である。そして、学部教授会でも承認されている。 ・ 国際教養学部のみに関することなく、全学的な貢献(例: PEセンター、高等教育推進センター、グローバル推進室など)やDS学部との連携する枠組みができた。</p>	<p>・ 本年度まとめた案や枠組みを新国際教養学部の発出となる2027年度に遂行できるように、着実に準備すること。 ・ 大きな枠組みは決まったので、個別の科目や担当者などの協議を引き続き実施すること。 ・ 必要な教員人事発議を行う。</p>
D 共通課題	1	<p>・ 来年度より、海外FWを含む海外渡航者数を設定し、継続的に海外渡航者数増を目指す。(R5:184名→R6:193名、4.9%増) ・ 2027年度からの新しいカリキュラムに向けてGSP見直しを進める。</p>	<p>・ 令和6年度における海外FWの参加者数の大幅な減少と、一方、2Qプログラムの増加の検討。 ・ 海外FWの補助金削減により、長期間の実習が難しくなっている。 ・ 2027年度の学部改組によるGSPの位置付けや改善の必要性。</p>	<p>・ 年間留学生数200名以上。 ・ 学部改組を踏まえたGSPプログラムへの改善。 ・ 学部改組後の海外FWの意見集約。</p>	後期	GSPプログラムの見直し	<p>・ 学部教授会で海外FWに関する意見効果をした。 ・ 1年生が多数履修する科目で、留学に関する案内をした。 ・ 2027年度のカリキュラム再編と連動して、GSPプログラムの見直しをした。</p>	<p>・ 2025年度の留学生数は合計205名である。内訳は学生派遣数160名、私費留学生数22名、交換留学生数23名である。昨年度の課題であった海外FW参加数が20名から36名に増加した。 ・ 2027年度のカリキュラム改組に向けて、英語も含めた外国語や異文化理解のプログラムを考案した。</p>	<p>・ 学生への留学を促進する。 ・ 2027年度に向けた新しいプログラムの具体的作業や導入に向けた作業を行う。</p>
D 共通課題	2	<p>【リカレント教育】 研究科と同じ</p>					<p>・ 学部で22講座を実施した。その内、本学部教員が講師を務めた講座は13講座(プログラム4件)、企画監修は9講座である。 ・ 参加延人数は、合計2,109名にのぼる。</p>	<p>・ 学部で22講座を実施した。その内、本学部教員が講師を務めた講座は13講座(プログラム4件)、企画監修は9講座である。 ・ 2027年度のカリキュラム再編の特色出しにつながる講座を開催する。</p>	
D 共通課題	3	<p>【大学院の定員超過及び未充足の改善】※研究科のみが対象 ※別紙: 令和6年度の収容定員率と入学定員充足率を認証評価共通基礎データ様式にて確認(データは事務局にて作成)するため本欄は記入不要</p>	<p>【令和6年度の収容定員充足率が100%~120%以外の場合に記載。また、令和6年度の入学定員充足率が100%未満の場合に記載】</p>	<p>【令和6年度の収容定員充足率が100%~120%以外の場合に記載。また、令和6年度の入学定員充足率が100%未満の場合に記載】</p>			<p>【令和6年度の収容定員充足率が100%~120%以外の場合に記載。また、令和6年度の入学定員充足率が100%未満の場合に記載】</p>	<p>別紙: 令和7年度の定員管理と大学院進学率を認証評価共通基礎データ様式にて確認(データは事務局にて作成)するため本欄は記入不要</p>	<p>【令和7年度の収容定員充足率が100%~120%以外の場合に記載。また、令和7年度の入学定員充足率が100%未満の場合に記載】</p>

令和7年度自己点検シート <国際商学部>

※セルの行数、幅は変更自由です。

項目	枝番	Plan			Do		Check	Action
		1 取組	2 課題	3 到達目標	4 スケジュール			
					時期	内容		
A 教育	1	<p><全学共通項目> ※本欄は学部・研究科で追記等不要</p> <p>【教育の質保証・IRとの連動】 大学設置基準に基づき、厳格かつ客観的な成績評価の実施</p> <p>[参考]大学設置基準 (成績評価基準等の明示等) 第二十五条の二 (略) 2 大学は、学修の成果に係る評価及び卒業の認定に当たっては、客観性及び厳格性を確保するため、学生に対してその基準をあらかじめ明示するとともに、当該基準にしたがって適切に行</p>	<p><全学共通項目> ※本欄は学部・研究科で追記等不要</p> <p>成績評価に著しい偏りがないか学部・研究科単位で確認し、偏りがある科目については是正の取り組みがされている。なお、成績評価の確認に当たっては、GP (Grade Point) を活用する。</p>	6月	令和6年度後期科目の状況の点検	<p>履修者登録者50名以上でGP平均(成績登録者)3.5を唯一超えていた寄付講座については窓口教員を通じて対応を依頼、ご快諾いただいた。</p> <p>履修登録者50名以上でGP平均(成績登録者)2.0を切っていた7科目は、経済3;経営2,会計1,法律1と、国際商学部全分野に及んでいたわけだが、これは24単位のフル登録の下、様子を見て試験を受けなくなる学生が理由と考えられ、履修取り下げ期間を後ろに下げれば解決する問題であるとの学部内合意が得られている。</p>	<p>国際総合科学群・医学群それぞれのIRで成績評価の実施状況を分析・確認 ※教学IRにて作成する実施報告書を参照するため本欄は記入不要</p>	<p>履修取り下げ期間を後ろに下げる事務対応をお願いしてみたい。</p>
				10月	令和7年度前期科目の状況の点検			
A 教育	2	<p>学位の質の保証を卒論・ゼミのみに頼る古風なヨーロッパ伝統一本槍を脱し、必修科目群によって学位の質の保証を図るアメリカ型(あるいは私学のみならず東京大学・京都大学を筆頭に多くの社会科学系国立型)を併置する。</p>	<p>【教育の質向上】 ゼミ・卒論選択制の準備は、学士(経済学)においてはほぼ整ったので、学士(経営学)側の意思決定を待ちつつ、事務電算からの許可が出次第移行できるように細かな準備を進めたい。</p>	前期	<p>少なくとも学士(経済学)は速やかな移行が蓋なくできる体制を整える。</p>	<p>学位の質を高めるために学部内の議論を進めた。</p>	<p>国際教養が大きく動くという情報を得て、現在仕切り直しが行われつつある。</p>	<p>2027年度からの事務電算改変に間に合わせる事が期待されている。</p>
				後期	他部局の速やかな対応を期待する。			
C 特色出し	1	<p>【特色を出す取組】 自然言語に関しては、商学部らしく企業との連携にも鑑み、TOEFL-ITP500よりもTOEIC600を前面に示し、人工言語(数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度(MDASH応用基礎レベル)等)や、各種資格試験に繋がる会計言語を含む2~3本足にし、人文系、あるいは私立文系と異なる特色とする。</p>	<p>立脚する技能の数を整えようとする学生がバランスを取れるようにするため、企業からも評価をいただきやすい、TOEIC600のみによるPE代替認定科目を設置し、過度な負担を軽減する必要がある。特にPE未修得2年生のPE強制配属は、積み重ね型の他科目に対する悪影響も大きいので取り止め、PE未修得者の(PE以外の)履修単位上限を21単位にする等に止めたい。</p>	前期	<p>遅くとも2027年度入学生からの実施を目指し共通教養および事務との交渉に入る</p>	<p>他部局との交渉が必要ない、1年次基礎クラス(経済学入門、経営学入門、簿記入門、ビジネス統計)のクラス指定を行った。</p>	<p>1年次基礎科目の一般の共通教養科目からの離脱がなされ、全員がゼミ履修要件を満たすなどの効果が出た。</p>	<p>2年次PE再履クラスをTOEIC 600のみによる単位認定クラス導入により減らし、IELTS対応等のAPEクラスに転換していくなどの、メリハリをきかせた英語教育のアイデアの採用を求めたい。</p>
				後期	他部局の速やかな対応を期待する。			
D 共通課題	1	<p>【グローバル教育】 英語による(国際標準の)講義科目が国際商学部にも多いという実態があるせいか、旧制商科大学の伝統もあるヨーロッパ系の大学から国際商学部ご指名の学部間交換留学の御提案を相次いでいただく。</p>	<p>就活までに全員にTOEIC600を取らせるとい企業向けの基礎固めは、その売り出しを除き成功しているが、専門科目の単位取得レベルの交換留学に関しては入超が続いている。</p>	通年	<p>旧制商科大学の伝統もあるヨーロッパ系の大学等から国際商学部御指名の学部間交換留学の提案は、学内調整に時間を費やすことなく積極的に受け入れていく。</p>	<p>英語による専門科目の充実力を割き、全学部の中で最多の提供数になっている。</p>	<p>全学部の中で最多の英語による交換留学生を得ている。</p>	<p>学部間の交換留学が入超になっているので、学部単位の交換留学の機会を増やし、2年次での海外語学研修ではなく、3年次の正規の交換留学へ学生を誘う準備を進めたい。そのためにはIELTS対応のAPEなどを交換留学を希望する学生には十分に供給することが期待される。</p>
D 共通課題	2	<p>【リカレント教育】 「研究科と同じ」</p>				<p>【リカレント教育】 「研究科と同じ」</p>	<p>【リカレント教育】 「研究科と同じ」</p>	<p>【リカレント教育】 「研究科と同じ」</p>
D 共通課題	3	<p>【大学院の定員超過及び未充足の改善】※研究科のみが対象 ※別紙：令和6年度の収容定員率と入学定員充足率を認証評価共通基礎データ様式にて確認(データは事務局にて作成)するため本欄は記入不要</p>	<p>【令和6年度の収容定員充足率が100%~120%以外の場合に記載。また、令和6年度の入学定員充足率が100%未満の場合に記載】</p>	<p>【令和6年度の収容定員充足率が100%~120%以外の場合に記載。また、令和6年度の入学定員充足率が100%未満の場合に記載】</p>	<p>【令和6年度の収容定員充足率が100%~120%以外の場合に記載。また、令和6年度の入学定員充足率が100%未満の場合に記載】</p>	<p>別紙：令和7年度の定員管理と大学院進学率を認証評価共通基礎データ様式にて確認(データは事務局にて作成)するため本欄は記入不要</p>	<p>【令和7年度の収容定員充足率が100%~120%以外の場合に記載。また、令和7年度の入学定員充足率が100%未満の場合に記載】</p>	

※セルの行数、幅は変更自由です。

項目	Plan				Do		Check	Action
	令和6年度シート転記「次年度での取組に向けて」	1 取組	2 課題	3 到達目標	4 スケジュール			
					時期	内容		
A 教育	1	<p><全学共通項目> ※本欄は学部・研究科で追記等不要</p> <p>【教育の質保証・IRとの連動】 大学設置基準に基づく、厳格かつ客観的な成績評価の実施</p> <p>[参考]大学設置基準 (成績評価基準等の明示等) 第二十五条の二 (略) 2 大学は、学修の成果に係る評価及び卒業の認定に当たっては、客観性及び厳格性を確保するため、学生に対してその基準をあらかじめ明示するとともに、当該基準にしたがって適切に行</p>	<p><全学共通項目> ※本欄は学部・研究科で追記等不要</p> <p>成績評価に著しい偏りがないか学部・研究科単位で確認し、偏りがある科目については是正の取り組みがされている。なお、成績評価の確認に当たっては、GP (Grade Point) を活用する。</p>	6月	令和6年度後期科目の状況の点検	<p>1. 今後の成績評価の目安としてもらうため、各分野のGP平均値と成績評価割合、および各科目のGP平均の分布をグラフ化し、7月の理学部教授会で情報共有した。</p>	<p>国際総合科学群・医学群それぞれのIRで成績評価の実施状況を分析・確認 ※教学IRにて作成する実施報告書を参照するため本欄は記入不要</p>	<p>1. 各教員の基準に基づいた成績評価を尊重するとともに、学部内の専門科目の情報共有を進める。</p>
				10月	令和7年度前期科目の状況の点検			
A 教育	2	<p>【教育の質向上】</p> <p>1. データ関連科目に関するカリキュラム案の検討と現カリキュラムの評価と見直し 2. 卒業研究の質向上の検討</p>	<p>1. 現カリキュラムの評価・検証およびデータ関連科目(シミュレーション・インフォマティクス)カリキュラム案のさらなる検討が必要 2. 卒業研究の質の底上げ(継続課題)</p>	通年	分野毎にカリキュラムについて検討	<p>1. カリキュラムについて分野毎に検証し改善点を検討した。 2. R6WGで検討したデータ関連科目のカリキュラム案を継続検討した。 3. 卒業研究単位修得の最低基準の検討と質の確認を行なった。 4. 3ポリシーを確認しカリキュラムマップを作成した。</p>	<p>1. R9開始予定の新カリキュラム案を作成中である。 2. データ関連科目のカリキュラム案を開始できるよう整備した。 3. 卒業研究の質向上に向けて基礎学力を上げるため、研究室配属時の最低単位について議論した。</p>	<p>1. データ関連科目のカリキュラムを含むR9新カリキュラムの最終調整 2. 卒業研究単位修得の最低基準の検討と質の確認</p>
				通年	データ関連科目のカリキュラムを検討			
				通年	卒業研究取得の最低基準について検討			
				夏～秋頃	卒業研究の中間発表会開催			
B 研究	1	<p>【研究力の向上】※研究科のみ記入</p>						
C 特色出し	1	<p>【特色を出す取組】</p> <p>1. 理数マスター修了生5名以上を継続的な運営体制の整備 2. 理系キャリアセミナーの実施</p>	<p>1. 理数マスターの継続・修了者数の向上、および運営の引き継ぎ 2. 大学院進学率の促進</p>	4月	理数マスターガイダンス	<p>1. 理数マスター修了生5名以上を継続できるしくみづくりと継続的な運営体制を構築した。 2. 大学院進学率の増加にむけたキャリア支援等は実施できなかった。</p>	<p>1. 理数マスター運営委員会を再整備し継続的な運営体制を構築した。</p>	<p>1. 理数マスター運営委員会の継続 2. 大学院進学率の増加にむけたキャリア支援等</p>
				9月	理数マスター進捗報告会			
				3月	理数マスター年度未報告会・修了会			
				通年	理数マスター運営体制の整備			
D 共通課題	1	<p>【グローバル教育】</p> <p>1. 短期留学や長期休暇を利用した海外派遣プログラム参加者をサポート 2. 研究交流を目的とした海外FWの周知と参加推奨</p>	<p>1. 目標20名に対して、長期・短期留学者は18名であったが、海外FW参加者は0名であった。</p>	4月	オリエンテーションや保護者懇談会でのプログラムの紹介 グローバル推進室と協力して渡航プログラム、オンラインプログラムの参加誘導、基礎ゼミでの紹介	<p>1. オリエンテーション、基礎ゼミやGlobal Scienceにてプログラムを紹介した。 2. 研究科と合同で海外フィールドワークを計画した。</p>	<p>1. 目標20名に対して、長期・短期留学者は10名(自己手配含む)、海外FW参加者は0名であった。</p>	<p>1. 短期留学、長期留学や海外との研究交流などの経験率の増加に関しては、留学費用が課題している現在、研究発表の機会である海外FWを周知し参加を促す。</p>
				後期				
D 共通課題	2	<p>【リカレント教育】</p> <p>1. 理学部・理系研究科として実施できていなかった、またはプログラム参加者がいなかった。</p> <p>1. 横浜市教育委員会からの要望により横浜市高校教員研修を行う。</p>	<p>1. 社会人が参加しやすいようリカレント教育を実施できていなかった。</p> <p>1. 横浜市高校教員研修を実施する。</p>	8月	横浜市高校教員研修	<p>1. 横浜市高校教員研修を実施した。</p>	<p>1. 8月19日にサイエンスフロンティア高校において横浜市高校教員研修を実施した。 講師：横山先生 テーマ：予想外を価値にしていこう 理数探究のファシリテーション～「答えを求める」ではなく「手を動かしながら」ために～ 理科8名、数学3名、情報科3名、地歴公民1名の合計15名が参加</p>	<p>1. 高大連携事業を通してリカレント教育の機会を検討する。</p>
D 共通課題	3	<p>【本学課の定員超過及び未充足の改善】※研究科のみが対象 ※別紙：令和6年度の取得定員率と入学定員充足率を認証評価共通基礎データ様式にて確認(データは事務局にて作成)するため本欄は記入不要</p>	<p>【令和6年度の取得定員充足率が100%～120%以外の場合に記載。また、令和6年度の入学定員充足率が100%未満の場合に記載】</p>	<p>【令和6年度の取得定員充足率が100%～120%以外の場合に記載。また、令和6年度の入学定員充足率が100%未満の場合に記載】</p>			<p>別紙：令和7年度の定員管理と大学院進学率を認証評価共通基礎データ様式にて確認(データは事務局にて作成)するため本欄は記入不要</p>	

令和7年度自己点検シート <データサイエンス学部>

※セルの行数、幅は変更自由です。

項目	枝番	Plan				Do		Check	Action	
		1 取組	2 課題	3 到達目標	4 スケジュール		5 改善に向けた具体的取組	6 成果	7 次年度の取組に向けて	
					時期	内容				
A 教 育	1	<p>令和6年度シート転記「次年度での取組に向けて」</p> <p><全学共通項目> ※本欄は学部・研究科で追記等不要</p> <p>【教育の質保証・IRとの連動】 大学設置基準に基づく、厳格かつ客観的な成績評価の実施</p> <p>[参考]大学設置基準 (成績評価基準等の明示等) 第二十五条の二 (略) 2 大学は、学修の成果に係る評価及び卒業の認定に当たっては、客観性及び厳格性を確保するため、学生に対してその基準をあらかじめ明示するとともに、当該基準にしたがって適切に行</p>	<p><全学共通項目> ※本欄は学部・研究科で追記等不要</p> <p>成績評価に著しい偏りがないか学部・研究科単位で確認し、偏りがある科目については是正の取り組みがされている。なお、成績評価の確認に当たっては、GP (Grade Point) を活用する。</p>	6月	令和6年度後期科目の状況の点検	<p>教学IR検討ワーキングメンバーが中心となって、科目の成績評価分布を確認した。さらにその結果を学部教授会で共有し、意見交換を行った。</p>	<p>国際総合科学群・医学群それぞれのIRで成績評価の実施状況を分析・確認 ※教学IRにて作成する実施報告書を参照するため本欄は記入不要</p>	<p>他学部と比べてGPAが全体的に若干高めであることを留意しつつ、引き続き、他学部との比較や過年度との比較を通じて、成績評価の厳格性・客観性について担保されているか確認していく。</p> <p>また、特に新任教員や他学部から移籍の教員にも、学部教授会等の機会を通じて、学部の成績評価の現状について情報共有を行う。</p>		
				10月	令和7年度前期科目の状況の点検					
A 教 育	2	<p>ADEPT プログラム 総合講義(DS入門)は来年度以降も対面とオンデマンドの併用講義となるが、担当教員の負担減と運用安定化を両立させるべく継続的に改善する。来年度目標値は51%。</p> <p>DS人材育成プログラム 来年度目標値90%を達成すべく、フォロワーのいっそうの強化をはかる。あわせて、修了者の増加のための履修指導も実施していきたい。</p>	<p>【教育の質向上】</p> <ul style="list-style-type: none"> 文部科学省認定プログラムのADEPTプログラムとデータサイエンス人材育成プログラムの円滑な運営を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 教員の増員を踏まえて、全学部の学生向けのADEPTプログラムの必修科目の総合講義(データサイエンス入門)の担当教員と内容を再検討する必要がある。 プログラム参加の申請可能期間が限られており、学生の申請遅れが生じるおそれがある。 	4月	全学部のオリエンテーションで周知徹底する	<p>年度初めの学部学年別オリエンテーションで、ADEPTプログラムおよびデータサイエンス人材育成プログラムの周知を行った。さらに1年生向けには、必修科目の授業内で、データサイエンス人材育成プログラムの周知を行った。</p> <p>総合講義(データサイエンス入門)では、新任教員の担当を増やし、内容の更新を図った。</p>	<p>ADEPTプログラムの申請者数は、1年生の在籍数63名に対して46名となり、申請率は73.0%であった。 データサイエンス人材育成プログラムの申請者数は、全学年の在籍数276名に対して260名となり、申請率は94.2%となった。特に、1年生は在籍数63名に対して、申請者数は60名となり、申請率は95.2%であった。</p>	<p>データサイエンス人材育成プログラムについては、申請率が9割を超えたことから、今後は修了率の増加を図っていく。</p> <p>データサイエンス人材育成プログラムの科目の内容について、社会状況の変化に対応して更新を図っていく。</p>	
					4.10月	DS人材育成プログラム申請期間に1年生は全員に周知し、2年生以上は未申請者に個別フォローを行う				
					後期	総合講義の運営を行う				
A 教 育	3	<p>カリキュラム改訂後3年目の新規科目(PBL演習(非構造化データ))が3年生向けに開講する。本PBLでは、ゼミ配属のグループ毎に指導教員がテーマを設定し実施。そのため、全教員がPBL演習に能動的に参加することとなり、教員のDS教育におけるPBLの重要性を認識するきっかけになることを望む。</p>	<p>【教育の質向上】</p> <ul style="list-style-type: none"> カリキュラム改訂後2回目の実施となるPBL演習(ビジネス・サイエンス)を適切に実施する。 1回目の実施となるPBL演習(非構造化データ)を、FDを通して円滑に運営し、卒業論文の質向上につなげていく。 	<ul style="list-style-type: none"> 企業と協力関係(離脱する企業がある場合に、代わる協力企業を開拓する)を維持する必要がある。 各教員は専門領域演習IIとPBL演習(非構造化データ)を担当するため、特に新任教員には負担が大きい。 	<ul style="list-style-type: none"> URAの協力も得て、企業との協力関係の深化と新規企業を開拓を行う。 新カリキュラムの新科目であるPBL演習(非構造化データ)を各教員で円滑に実施する。 	4.5月	協力企業と連携し、PBL演習(ビジネス・サイエンス)を実施する	<p>2年次向けのPBL演習(ビジネス・サイエンス)の実施に当たっては、協力企業と緊密に連携するとともに、学生への情報共有の徹底を図った。各ゼミの配属人数の最大値を6名から4名とした。</p> <p>現行のPBL科目に関して、学部内FDを実施し、情報共有を行った。</p>	<p>2年生向けに企業の協力を得て、PBL演習(ビジネス・サイエンス)を実施した。 3年次夏休みのPBL実習では、65名のうち希望のあった50名を10社のいずれかに各々派遣し、社会の現場におけるデータサイエンス教育を行った。 各ゼミの配属人数の最大値を6名から4名とすることで各学生への指導を充実させ、PBL演習(非構造化データ)の実施をより効果的に行った。 2027年度の再編後のPBL科目の充実に向け、現行のPBLに関して学部教員間で情報共有が行われた。</p>	<p>PBL演習(ビジネス・サイエンス)では、より多くの教員の協力を得る。他学部から移籍予定の教員の協力も得て、現行のPBLに関してFDを実施することで、教員間の意識の統一を図り、再編後のPBL科目の充実につなげる。</p> <p>3年次夏休みのPBL実習では、協力企業へ学生を派遣する。</p>
						通年	DS学部教員の人脈やURAを活用し、企業開拓を行う			
						前期	URAやIAによるPBL実習の補助を行う			
						前期	PBL実習へ3年生を派遣する			
						後期	企業15社協力の下、PBL入門を実施する			
B 研 究	1	<p>【研究力の向上】 ※研究科のみ記入</p>								

※セルの行数、幅は変更自由です。

項目	校番	Plan				Do		Check	Action
		1 取組	2 課題	3 到達目標	4 スケジュール		5 改善に向けた具体的取組	6 成果	7 次年度の取組に向けて
					時期	内容			
C 特色 出し	1	・年度当初から目標受講率の達成を念頭にFD等取組を行う。 ・海外FDについて、引き続き実施をしていく	・新規入職する全教員に対してカリキュラム動画の視聴を促す等、年度初めから受講率を上げるための施策を行う。 ・従前同様、海外FD（ハワイ大学PBL）への参加者募集を行う。	・多忙で不規則な勤務体系で働く医師のための受講促進方法の検討。	・FD受講率85%以上 ・海外FDへの教員派遣1名	通年	①FDの受講促進	・受講勧奨のため、ベストティーチャー賞受賞教員による動画等を新規作成した。 ・受講率96%（1月28日時点） ・ベストティーチャー動画の公開後、受講率が急上昇し、当該動画へのコメントも多数寄せられた。 ・海外FD（ハワイ大学PBL）については先方の都合により今年度は実施されなかった。	・次年度もベストティーチャー賞受賞者等による動画を作成する。 ・次年度はハワイ大学から教員を本学に招聘し、学内でPBL等のFDを行う。
						12月まで	②海外FDの企画実施		
D 共通 課題	1	・シンガポール国立大学（NUS）医学部長を本学に招聘し、12月上旬に"NUS Week in YCU"を開催する。 ・学生派遣選考方法を具体的に見直し、応募学生と派遣先機関（大学）との最適なマッチングを行い、より多くの市大生を派遣する。 ・リサクラでの派遣先機関（大学）の新規開拓を検討する。	・医学部長他、招聘するNUS教員および実施内容を検討し確定する。 ・限られた時間の中で、書類や面接選考を通じて応募学生の適性を的確に把握する。	・予定されたNUS Weekの実施内容を確実に実施。 ・応募のあった全学生をいずれかの派遣先機関（大学）に派遣する（本人が希望しない場合や派遣基準に満たない場合を除く） ・2026年春にリサクラでの新規派遣を行う。	5月	(NUS Week) 実施内容確定	・『NUS Week in YCU』の開催に際し、円滑かつ的確な事前調整を行うため、教員1名および職員1名をNUSへ派遣した。両名は現地において対面での協議や打ち合わせを重ね、プログラム内容や運営体制に関する詳細な確認を行うとともに、先方担当者との間で緊密かつ継続的なコミュニケーションを構築し、当該事業の実施に向けた調整を着実に進めた。 ・よりきめ細かな学生派遣選考を実施するため、書類選考と面接選考を分けて行うこととした。 ・2026年春のリサクラ派遣先を開拓するため、既存の協定校の中から、派遣の可能性が高い大学を検討抽出した。	・12月2日～4日まで『NUS Week in YCU』を開催した。NISからは5名の幹部職を迎え、本学からは約150名の参加があった。 ・2027春についても、新規クリクラまたはリサクラ派遣先の開拓を検討する。 ・学生派遣選考を書類選考と面接選考に分けて実施したことで、学生一人ひとりの適性や能力をより正確に把握できた。その結果、派遣先とのマッチング精度が向上し、選考全体の質が大きく高まった。 ・2026春、新規にストラスブル大学に学生派遣をすることとなった。	・NUSと協働を進める領域やプロジェクトを検討する。 ・2027春についても、新規クリクラまたはリサクラ派遣先の開拓を検討する。
					7月	(NUS Week) 招聘者確定			
					11月	(NUS Week) 実施内容最終確定			
					12月	(NUS Week) 実施			
					6、9、3月	学生派遣選考			
					通年	派遣先の開拓、実施に向けて調整			
2		【リカレント教育】 研究科と同じ							
3		【データ思考】 ・カリキュラムを通じてEBM教育を実践するため、教員向けのオリエンテーション等を活用して周知していく。 ・科目ごとにコアカリキュラムで定めるEBM教育の実施状況対応表を集計する。	・医学教育分野別評価において、「臨床実習でEBMの教育を実践する機会を十分持つべき」という指摘を受けており、EBM教育の浸透が求められる。	・EBM教育を基盤とした講義・実習の実施拡充に向けた方針が策定され、実施されている。	上半期 EBM教育の理解促進に関する説明会等の実施 上半期 EBM教育実施状況対応表の作成 下半期 EBM教育を基盤とした講義・実習の実施拡充	・3年生「疫学・予防医学」の授業では、EBMに関する授業を行っている。	・4～6年生の臨床実習においては、EBM教育を取り入れるように各診療科のシラバスに記載を行った。	・臨床実習におけるEBM教育を継続するとともに、新規着任教員に対してもその必要性を訴求していく。	
4		【大学院の定員超過及び未充足の改善】※ 研究科のみが対象 ※別紙：令和6年度の収容定員率と入学定員充足率を認証評価共通基礎データ様式にて確認(データは事務局にて作成)するため本欄は記入不要	【令和6年度の収容定員充足率が100%～120%以外の場合に記載。また、令和6年度の入学定員充足率が100%未満の場合に記載】	【令和6年度の収容定員充足率が100%～120%以外の場合に記載。また、令和6年度の入学定員充足率が100%未満の場合に記載】	【令和6年度の収容定員充足率が100%～120%以外の場合に記載。また、令和6年度の入学定員充足率が100%未満の場合に記載】 ⇒対象外	別紙：令和7年度の定員管理と大学院進学率を認証評価共通基礎データ様式にて確認(データは事務局にて作成)するため本欄は記入不要 ⇒対象外	【令和7年度の収容定員充足率が100%～120%以外の場合に記載。また、令和7年度の入学定員充足率が100%未満の場合に記載】 ⇒対象外		

令和7年度自己点検シート <医学部看護学科>

※セルの行数、幅は変更自由です。

項目	校番	Plan			Do		Check	Action	
		1 取組	2 課題	3 到達目標	4 スケジュール	5 改善に向けた具体的取組			6 成果
		令和6年度シート転記「次年度での取組に向けて」			時期	内容			
A	1	<p><全学共通項目> ※本欄は学部・研究科で追記等不要</p> <p>【教育の質保証・IRとの連動】 大学設置基準に基づく、厳格かつ客観的な成績評価の実施</p> <p>[参考]大学設置基準 (成績評価基準等の明示等) 第二十五条の二 (略) 2 大学は、学修の成果に係る評価及び卒業の認定に当たっては、客観性及び厳格性を確保するため、学生に対してその基準をあらかじめ明示するとともに、当該基準にしたがって適切に行う。</p>		<p><全学共通項目> ※本欄は学部・研究科で追記等不要</p> <p>成績評価に著しい偏りがないか学部・研究科単位で確認し、偏りがある科目については是正の取り組みがされている。なお、成績評価の確認に当たっては、GP (Grade Point) を活用する。</p>	6月	令和6年度後期科目の状況の点検	<ul style="list-style-type: none"> ・成績評価の数量的分析 ・現状の成績評価、GP平均値と成績登録者数の分析 	<p>国際総合科学群・医学群それぞれのIRで成績評価の実施状況を分析・確認 ※教学IRにて作成する実施報告書を参照するため本欄は記入不要</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・成績評価、GP値、成績登録者数の分析を継続実施する ・結果の分析を行い、整理する ・課題を抽出する ・課題があった場合、課題に対する方策を検討する
A	1	<ul style="list-style-type: none"> ・データ思考や創造的な学びを学生に意識させる教育ができ、教育の質保証の担保と共に各分野の特徴からより充実していくための取り組みをしていく ・1年生の留年者数が毎年必ず1名以上いることから時間割調整、履修指導、担任教員によるサポートを継続していく 	<p>【教育の質向上】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各専門科目でのデータ思考や創造的な学びを学生に意識づける能動的教育 ・留年者予防対策(学生向け資料の充実・時間割調整・共通教養との連携・担任面談) ・卒業研究によるリサーチマインドの基礎構築(看護実践との関連理解) ・学際的科目(領域横断的)としてキャリア形成看護学実習の充実 	<ul style="list-style-type: none"> ・引き続き学科生全体のリサーチマインドの底上げが必要。 ・学際的な科目(領域横断的科目)、キャリア形成看護学実習などの新カリキュラムの開講が多い 	<ul style="list-style-type: none"> ・卒業研究の研究計画書の提出率90%、卒業研究発表率90% ・卒業研究の学会発表率10% ・卒業研究の学会発表予定・学会発表実施・論文投稿予定・論文投稿実施件数15件/106名 ・新規科目である「多様性看護学演習」や「キャリア形成看護学実習(ベーシック・アドバンス)」を通じて、学生が自らのキャリアを創造できるような実習の特徴だとその割合を示す。 	4月～	<p>新入生へのADEPTプログラム動機づけオリエンテーション 担任面談</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・オリエンテーションや面談を利用してデータ思考、創造的な学びを学生に意識させることができた ・卒業研究の研究計画書の提出率100%、卒業研究発表率100% ・卒業研究の学会発表率15% (15名/98名中)、学術誌への論文投稿率10% (10名/98名中) (学会発表:看護生命科学1名、成人看護学3名、小児看護学1名、母性看護学7名、老年看護学8名、地域看護学2名)、(論文投稿:看護生命科学2名、母性看護学5名、老年看護学4名(投稿中2名含)、地域看護学2名;予定) ・1-3年生の学生の学会発表は13名であった。 ・担任教員によるPE単位未取得者への働きかけを行った。 ・キャリア形成看護学実習・アドバンスIIを履修した学生100名のうち、学生が選択したコースの内訳は、応用実践コース48%、国際看護学コース6%、リサーチコース36%、その他(複合型)8%であり、学生が希望するキャリアに応じた多様な実習形態をとることができた。 ・R6卒業生が学会で卒業研究を発表し、優秀論文賞を受賞した。(1件) 	<p>下記、R5と同じ(継続)です。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・データ思考や創造的な学びを学生に意識させる教育ができ、教育の質保証が担保できているため現在の取組を継続していく ・1年生の留年者数が毎年必ず1名以上いることから時間割調整、履修指導、担任教員によるサポートを継続していく
A	2	<ul style="list-style-type: none"> ・看護専門科目をADEPT科目に追加したことによる新規申請者および修了者を確認する ・ADEPTプログラムと看護学のロードマップを用いて履修を勧奨する ・総合講義(データサイエンス入門)を看護学科の推奨科目とし、履修を推奨する 	<ul style="list-style-type: none"> ・領域横断型のADEPTプログラムへの意義を学生が見いだせておらず参加修了人数の増加に結びついていない 	<ul style="list-style-type: none"> ・オリエンテーションでデータ思考の意義や必要性を説明し、最終的なADEPTプログラム修了者率25% 	4月	新入生への動機づけオリエンテーション、在校生(3,4年生への申請推奨)	<ul style="list-style-type: none"> ・新入生オリエンテーションにてADEPTプログラムの意義説明と科目の履修勧奨を実施した ・ADEPTプログラムの参加登録の勧奨を科目の前後およびメール配信等で継続的に実施した。 ・Webサイトやパンフレットなど広報を充実させる ・2025年度に「保健医療統計学」をADEPT対象プログラムに組み込み、実施した。 ・ADEPTの履修申請を簡略化し、手続きの改善を図った。 	<ul style="list-style-type: none"> ・新入生オリエンテーションにてADEPTプログラムの意義説明と科目の履修勧奨を実施した ・ADEPT新規申請者数は全学年合計で100名(R6:52名、R5:41名)であり、前年度から大幅に増加した。 ・ADEPT修了条件をすべて満たす3・4年生216名のうち、修了者数は74名(修了率34.2%・見込)であり、前年度(R6:29名、R5:4名)を大きく上回り、目標修了率25%を達成できた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・看護専門科目をADEPT科目に追加したことによる新規申請者および修了者を確認する ・ADEPTプログラムと看護学のロードマップを用いて履修を勧奨する ・総合講義(データサイエンス入門)を看護学科の推奨科目とし、履修を推奨する

令和7年度自己点検シート <医学部看護学科>

※セルの行数、幅は変更自由です。

項目	校番	Plan				Do		Check	Action	
		1 取組	2 課題	3 到達目標	4 スケジュール		5 改善に向けた具体的取組	6 成果	7 次年度の取組に向けて	
					時期	内容				
C 特色 出し	1	令和6年度シート転記「次年度での取組に向けて」 ブランド力が示せるように入試広報していく	【特色を出す取組】 ・ホームページの随時リニューアルをする ・本学の強みを改めて見直し、ブランド力を強調したPRを発信する	・受験者数を増やす必要がある ・ブランド力が伝わるような広報活動が必要である ・優秀な学生のリクルートのために面接基準の見直しが必要である ・ブランディングのための目標の明確化が必要である	・受験者と入学者の動向を確認する ・ブランド力となる具体的要因を明確化する ・受験者の基礎学力（共通テストの点数を含む）と面接点、さらには入学者の成績データを見直すとともに、受験方式別の経年的評価を行う ・各分野・各科目の特徴を把握し、本学のブランディングにどう役立つかが可視化する ・一般入試の併願校の把握と対策を検討する	4月～	入学者、進級学生の成績確認	・高校生を対象とした一日見学会イベントを実施した。夏と冬に3回に渡り看護学科HPおよび附属2病院で広報した。（イベント17件） ・出張講義を行い、体験を通じてながら、本学の魅力をPRした。 ・各領域の取組について、記事を募り適宜掲載を行った。 ・看護学科マイクロサイトのレイアウト改善について検討があった。	・看護マイクロサイト（ホームページ）アクセス件数40,275件、144,326PV（4/1～1/29） ・ホームページTOPICS掲載数17件	R6を継続 ・ブランド力が示せるように入試広報していく （英語版の大学紹介、学生の海外渡航率、学生の活動・受賞状況等の効果的配信）
						5月～	入試方法（具体的内容）の検討開始			
						2月	来年度入試結果の中間確認			
						3月	来年度入試の最終結果の確認			
C 特色 出し	2	【地域貢献活動】 YCU看護の魅力を発信する活動を推進する	【特色を出す取組】 ・共創イノベーションセンターと連携し、看護学科・領域の強みを共有・活用し、産学官民連携を推進していく。	・YCU看護の魅力となる地域貢献活動が十分に遂行、発信されていない	・学内外の連携が遂行され、YCU看護の魅力を発信する ・2024年度に作成した研究シーズ集を活用し、看護学科・各領域・各教員の強みを学内外へ発信する。 ・産学官民連携の推進に向けて、共創イノベーションセンター、地域貢献センターなどと連携し発信する	4月～	委員会による検討	・看護共創部門の主要な事業として、ホームページ等で以下の内容を情報発信した 1) リカレント教育である実習指導者講習会と看護学科生が相互に学び合う特色ある教育（科目） 2) 看護学科生、卒業生・修了生とともに実施した看護職のキャリア展望等についての様々なワークショップやイベントの開催（YCU看護の魅力発信プログラム）を実施した。 3) アルムナイネットワークの交流会に学生・教員が参加した。 4) 研究シーズ集を年3回更新し、11月にはテックカンファレンスに参加し広報を行った。 5) 共創イノベーションセンターと連携した結果、相談案件2件あり、日本補助犬協会プロジェクトが始動した。オープンキャンパスでイベントを行い、報告を大学紀要に掲載した。地域貢献センターとの連携強化により、相談案件が5件以上あり、横浜市・金沢区で災害発生時の福祉避難所での学生ボランティアは協定締結に至った。R8の講義への導入も2件決定した。 6) 学生と協働したFD研修会を実施した。（参加者：教員35名、学生23名）	【リカレント教育】 ・YCU看護キャリア開発支援センターで臨床看護キャリア部門と看護共創部門で連携し、実習指導者講習会、学部教育とリカレント教育を融合させた特色ある事業を推進する ・アルムナイネットワークと協働して広報・交流を進める。 【地域貢献活動・産学連携】 ・YCU看護の魅力を発信する活動を学生とともに推進する ・社会貢献センターとの連携を推進する。	
						6月	共創イノベーションセンターと連携			
						8月～	各種プロジェクトの実施			
						3月	各種プロジェクトのまとめ・発信			

※セルの行数、幅は変更自由です。

項目	校番	Plan				4 スケジュール		Do	Check	Action		
		令和6年度シート転記「次年度での取組に向けて」	1 取組	2 課題	3 到達目標	時期	内容	5 改善に向けた具体的取組	6 成果	7 次年度の取組に向けて		
D 共通 課題	1	<p>【グローバル教育】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・改訂したグローバル力自己育成ロードマップに沿って、学生に対してグローバル学習の動機づけを継続して行う ・国際関連科目・海外フィールドワークを継続するとともに、Teamsでの情報提供を活性化し学生の動機づけと参画機会増を目指す 	<p>【グローバル教育】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・看護学科学生が4年次に2Qプログラムや既存の国際科目に参加するための体制整備および学生の動機づけを行う ・学生が国際科目、海外フィールドワーク等の情報を周知し、参加学生数の増加につなげる 	<ul style="list-style-type: none"> ・2Qプログラムの読み替え単位が全学と統一されていないため、文科省への手続きをすすめる必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・海外派遣プログラムリストを作成し、学生に提示する ・作成したプログラムリストとロードマップを用いて学生への海外への関心を醸成し、2Qプログラム参加申込者5名に増加させる。 ・文科省に申請し承認される。 	5月～	プログラムリストの作成検討	<ul style="list-style-type: none"> ・グローバル力自己育成ロードマップを用いた授業、オリエンテーションでのグローバル学習の動機づけを行い、将来のキャリア形成を踏まえた学生教育を行った。 ・国際看護学演習を通じ、海外での活躍する看護師像や国際的な医療現場の視野を培った。 ・2Qプログラムの実施について、詳細を調整した。 ・担任教員によるPE単位未取得者への働きかけ ・国際関連科目・海外フィールドワークに関するTeamsでの情報提供を拡充した ・英語力向上委員会のTeamsにて、語学力の向上等につながる情報発信を適宜行った。 ・留学システム構築に向けてフィリピンWest Visayas State UniversityとMOAの締結準備を開始した ・共通教養科目「中期海外留学（看護学）」「短期海外留学（看護学）」「中期海外研修」「中期海外留学」の設置に向け、文科省への届け出を行った。 	<ul style="list-style-type: none"> ・グローバル教育推進委員会と連携し、看護学科が利用できる渡航プログラム（2Qプログラム・短期海外研修プログラム）を明確化し、時間割を調整し渡航可能にした。渡航プログラムに関するスケジュール、オリエンテーションや相談会は、学生Teams「海外活動・FW」より発信した。 ・PEの取得状況について 1) 1年生107名のうち40%がPE500点以上、10%が470～499点、12%が470点未満である。（入学時37%取得済）（2026年1月20日現在） 2) R7年度入学1年生107名のうち10.3%がAPEを履修した（11/107名）。 ・国際科目や海外フィールドワークについて 1) 国際看護学Ⅰのロールプレイを通して医療コミュニケーションの重要性を、GWでは日本に住む外国籍の人のグローバルヘルスの課題について学習することができた。さらに、海外で活躍するNPの講義や海外の大学の教員の講義、国際協力の経験をうかがうことで自身のキャリアを志向することにつながった 2) 国際看護学ⅡではJSTさくらサイエンスプログラムで招聘したインドネシアの学生との合同授業を実施し、災害時の精神看護について学びを深めることができた。 3) 国際看護学演習Ⅰではフィリピンにおけるフィールドワークに15名の学生が参加し、国際看護の学びの機会を得た。 4) 国際看護学演習Ⅱではハワイ大学看護学部との授業・演習に学生3名が参加し、現地の医療施設での見学実習から国際看護に関する理解を深めた。 5) 成人看護学領域におけるインドネシア学生とのオンラインFWを実施し、両国の保健医療への学びを深めた。 6) 国際関連科目・海外フィールドワークに関するTeamsでの情報提供の更新頻度が増えた。 7) JSTさくらサイエンスプログラムにてハサスデン大学看護学部長（精神看護学）より、インドネシアにおける海外看護の現状と課題について非常に示唆に富んだご講義をいただいた。 8) 留学システム構築に向けたフィリピンWest Visayas大学のMOA締結のドラフト案を作成し学科間承認を得、今後正式書類の作成と大学間承認を目指す。 9) 共通教養科目「中期海外留学（看護学）」「短期海外留学（看護学）」「中期海外研修」「中期海外留学」の4科目設置を文科省に届け出て、受理された。 10) 八景グローバル推進課の協力のもと国際留学プログラムに関する広報をオンラインやTeamsで積極的に発信した結果、海外渡航数69名（昨年度23%増）のうち、観光21名、49名がフィールドワーク21人、研修13人、留学11人、スタディツアー2人、ゼミ1人、ボランティア1人他であり留学ニーズが確認された。 	<ul style="list-style-type: none"> R5と同様（継続）を記載（教務分） ・グローバル力自己育成ロードマップに沿って学生に対してグローバル学習の動機づけを継続して行う ・国際関連科目・海外フィールドワークを継続するとともに、Teamsでの情報提供を活性化し学生の動機づけと参画機会増を目指す ・文科省に受理された留学科目の開講に向け、留学プログラムの構築を目指す 		
						7月～	作成したリストの学生提示				秋	2Qについての説明
							オリエンテーションによる海外渡航の動機づけ					

※セルの行数、幅は変更自由です。

項目	校番	Plan			Do		Check	Action		
		1 取組	2 課題	3 到達目標	4 スケジュール	5 改善に向けた具体的取組			6 成果	7 次年度の取組に向けて
		令和6年度シート転記「次年度での取組に向けて」			時期	内容				
2		【リカレント教育】 ・YCU看護キャリア開発支援センター看護共創部門を中心に、実習指導者講習会にてリカレント教育の充実を推進し、教育実践力の高い実習指導者の育成を行う	【リカレント教育】 ・実習指導者講習会の開講やリカレント教育の充実を推進することで教育実践力の高い実習指導者の育成を行う	・リカレント教育の充実が十分に広報されていない	・実習指導講習会に40名の受講生を受け入れたり、リカレント教育をさらに充実することで、参加者の満足度を向上できる。	4月～	リカレント教育の充実の検討	・神奈川県委託事業である実習指導者講習会の科目に、学部との合同開講を設定し、教育実践力を高める特色ある学びの場を提供した。 ・e-learningやオンライン講義なども併用しながら、働きながらの学習を支援しリカレント教育の推進を行った。 ・2月にフォローアップワークショップを開催する予定	・神奈川県委託事業である実習指導者講習会（定員40名）は4ヶ月間の講習会を開講し、40名全員が実習指導者としての高い教育実践能力を修得した上で修了となった ・教育実践力を高める特色ある科目として、学部（1年生、3年生）との授業・実習を合同開講した ・修了時アンケート調査にて受講者から高い満足度を得た	R5を継続 【リカレント教育】 ・「学部生とともに学ぶ」をコンセプトとした特色あるリカレント教育として、実習指導者講習会にて教育実践力の高い実習指導者の育成を行う ・ホスピタリティプロジェクトと連携して検討を行う
						8月～	講習会開講			
11月	講習会閉講									
2月	フォローアップ研修の実施									
3		【在学生・卒業生・看護職の交流推進】 ・YCU看護アルムナイ・ネットワークの構築による在学生・卒業生・看護職の交流推進	【在学生・卒業生・看護職の交流推進】 ・YCU看護アルムナイ・ネットワークの構築による在学生・卒業生・看護職の交流推進	・在校生、卒業生、看護職が交流会とのすまひけやアルムナイネットワークの理解がなされていない	・学内外でアルムナイ・ネットワークが周知される ・看護交流会とアルムナイ・ネットワークが連携した情報交流を実施する	4月～	プロジェクトによる検討再開	・退職者や実習指導者講習会修了者などに向け、アルムナイネットワーク会員増に向けた広報活動を実施した。 ・非在職者の登録者数8名 ・アルムナイネットワーク交流会を2回開催した。参加者55名（うち学生9名・大学院生1名・教員3名） ・アルムナイネットワークプロジェクト会議を年3回実施し、アルムナイネットワークでの会員特典を具体的に検討した。 ・看護交流会によるオフィスアワーの設定を行った。	・新たに大学SNS（X、facebook）、HPによる広報を強化し、カード型の広報媒体を作成し、会員増に向けた広報活動を実施した。 ・非在職者の登録者数8名 ・アルムナイネットワーク交流会を2回開催した。参加者55名（うち学生9名・大学院生1名・教員3名） ・アルムナイネットワークプロジェクト会議を年3回実施し、アルムナイネットワークでの会員特典を具体的に検討した。 ・看護交流会によるオフィスアワーを開催することで、学科生が気軽に就職相談をできる機会を持た。	R5を継続 【在学生・卒業生・看護職の交流推進】 ・YCU看護アルムナイ・ネットワークの構築による在学生・卒業生・看護職の交流推進
						6月	ホームページ等での広報、学内外での周知活動			
						8月～	イベントの検討			
						9月～	卒業生への登録推進、イベントの開催			
						2月	4年生（卒業時）の登録推進			
4	D 共通 課題	キャリア形成看護学実習、進路ガイダンス、就職支援セミナー等とキャリアポートフォリオの活用を通して、学生が自身のキャリアビジョンを描けるように支援する	【キャリア形成支援】 ・キャリア形成看護学実習アドバンスⅠⅡにより学生のキャリアが充実する ・学生の適性や将来のキャリアを考慮した学修・進路支援を行う	・卒業時および将来的な目標達成に向けて自分のキャリアビジョンが十分描けていない ・バカロレア入学生の特性を活かしたキャリア形成が十分支援できていない	・オリエンテーションや担任面談でキャリアポートフォリオの目的、意味づけを行う。 ・キャリアポートフォリオを用いた担任面談の実施率90% ・キャリア形成看護学実習アドバンスⅠⅡの内容の検討と評価を行う ・バカロレア入学生のこれまでの就職および進学の状況把握と課題を抽出し、特性を活かした支援策を検討する	4月	学年ごとのオリエンテーション、担任面談、キャリア形成看護学実習ⅠⅡの内容の検討	・キャリアポートフォリオによる面談（95%実施）によって、自己のアピールポイントと課題の明確化ができた。 ・進路ガイダンス、就職支援セミナーの事後アンケートでは学生の高い満足度を得た。 ・4年生106名のうち助産課程進学希望者11名（10.4%）に対し進学支援を行った。82%（9/11名）の学生が進学予定（2026年1月20日時点）。うち本学大学院博士前期課程への進学率は100%（3名）であった。 ・地域看護学交流会をTeams内で継続的に対面交流会を年1回行い、1～4年生の保健師選択課程在籍者・志望者、保健師就職希望者への支援を行った。（保健師選択課程志望者68名、決定者30名）	キャリア形成看護学実習、進路ガイダンス、就職支援セミナー等とキャリアポートフォリオの活用を通して、学生が自身のキャリアビジョンを描けるように支援する。 ・助産進学希望者および保健師選択課程希望者が例年多いため、説明会等も含め更なる効果的な支援を行う。	
						7月	バカロレア入学生のこれまでの就職および進学の状況把握と課題を抽出			
						9月	進路ガイダンス・担任面談			
						11月	就職支援セミナー			
						12月	進路ガイダンス			
						1月	担任面談、就職支援セミナー キャリア形成看護学実習ⅠⅡの評価			
5		【大学院の定員超過及び未充足の改善】※研究科のみが対象 ※別紙：令和6年度の収容定員率と入学定員充足率を認証評価共通基礎データ様式にて確認（データは事務局にて作成）するため本欄は記入不要	【令和6年度の収容定員充足率が100%～120%以外の場合に記載。また、令和6年度の入学定員充足率が100%未満の場合に記載】	【令和6年度の収容定員充足率が100%～120%以外の場合に記載。また、令和6年度の入学定員充足率が100%未満の場合に記載】			【令和6年度の収容定員充足率が100%～120%以外の場合に記載。また、令和6年度の入学定員充足率が100%未満の場合に記載】		【令和7年度の収容定員充足率が100%～120%以外の場合に記載。また、令和7年度の入学定員充足率が100%未満の場合に記載】	

令和7年度自己点検シート <都市社会文化研究科>

※セルの行数、幅は変更自由です。

		Plan	Do	Check	Action	
項目	枝番	令和6年度シート転記「次年度での取組に向けて」	1 取組	5 改善に向けた具体的取組	6 成果	7 次年度の取組に向けて
A 教育	1		<p><全学共通項目> ※本欄は学部・研究科で追記等不要</p> <p>【教育の質保証・IRとの連動】 大学設置基準に基づく、厳格かつ客観的な成績評価の実施</p> <p>[参考]大学設置基準 (成績評価基準等の明示等) 第二十五条の二 (略)</p> <p>2 大学は、学修の成果に係る評価及び卒業の認定に当たっては、客観性及び厳格性を確保するため、学生に対してその基準をあらかじめ明示するとともに、当該基準にしたがって適切に行う。</p>	<p>・実態を把握した結果、他研究科との相対的には成績分布の偏りは少ないことを確認した。</p> <p>・意見交換を行い、授業の実施形態等が評価に影響すること等を踏まえつつ、<u>研究科として適正な評価基準の必要性があることを共有した。</u></p>	<p>国際総合科学群・医学群それぞれのIRで成績評価の実施状況を分析・確認 ※教学IRにて作成する実施報告書を参照するため本欄は記入不要</p>	<p>・適正な評価基準等検討のため、今後、<u>評価の前提となる少人数講義、演習的科目等の実態を把握する。</u></p> <p>・前項の結果を踏まえ、<u>必要に応じて評価基準の申し合わせ等の作成を検討する。</u></p>
A 教育	2	<p>・修論のオンライン提出に向けて検討を行う。</p> <p>・博士課程満期退学時に「研究演習VI」取得のために提出する「単位修得論文」と、代替としての「予備論文」提出による退学後の学位取得のあり方について問題点を整理し、検討を行う。</p> <p>・満期退学者を対象とする「共同研究員に関する申し合わせ」に関する問題点について検討する。</p> <p>・学部教育と大学院教育の内容やレベルに差がある点について、学部再編に合わせて継続的に検討する必要がある。</p>	<p>【教育の質向上】</p> <p>①修士論文のオンライン提出方法を検討し、導入を図る。</p> <p>②「単位修得論文」と「予備論文」の関係および退学後の学位取得のあり方について問題点を整理して改善策を検討し、内規等を改定する。</p> <p>③満期退学者を対象とする「共同研究員に関する申し合わせ」に関する問題点について検討し改善する。</p> <p>④学部教育と大学院教育の内容やレベルに差がある点、2年後のDS学部拡充に伴う学部カリキュラムの再編などを踏まえつつ、学部・大学院一貫教育の可能性について検討する。</p>	<p>・研究科の今後のあり方に関する検討WG（あり方WG）を設置し、本項目を含めて研究科の現状と課題の分析、今後の方向性を検討してきた。メンバーは運営会議委員。</p> <p>・教授会で適宜あり方WGの検討状況を共有し、若手教員を中心に意見交換を行った。</p>	<p>・<u>修士論文のオンライン提出方法を2026年度より導入。</u></p> <p>・「単位修得論文」と「予備論文」の関係および退学後の学位取得のあり方を整理し、履修ガイド等関係の記述・規定を更新。</p> <p>・満期退学者を対象とする「共同研究員に関する申し合わせ」についてあり方WGで再検討。</p> <p>・あり方WGで学部・大学院一貫教育の可能性を検討。</p>	<p>・一部教員のDS学部への移籍も踏まえ、<u>研究科の専門・学びの構造を見える化する必要がある。</u>そのうえで、下記は検討途中であり、具体的結果につなぐ必要がある。引き続きあり方WGでの検討と具体化を継続する。</p> <p>・満期退学者を対象とする「共同研究員に関する申し合わせ」についてあり方WGで再検討。</p> <p>・あり方WGで学部・大学院一貫教育の可能性を検討。</p>

令和7年度自己点検シート <都市社会文化研究科>

※セルの行数、幅は変更自由です。

		Plan	Do	Check	Action	
項目	枝番	令和6年度シート転記「次年度での取組に向けて」	1 取組	5 改善に向けた具体的取組	6 成果	7 次年度の取組に向けて
B	研究	1	<p>・ 科研費非保有者の応募率をのばす工夫のほか、文理融合に関わる研究連携を強化し、大型研究費の獲得を目指す研究環境や教育、異分野との研究交流について構想する必要がある。</p> <p>【研究力の向上】※研究科のみ記入</p> <p>①現在、研究科が主催する研究会の運営の問題点の明確化と再編・活性化を検討する。</p> <p>②科研費等、外部資金応募の情報共有を推進し、URAとの連携やFD実施等、採択率向上に努める。</p> <p>③J-PEAKSへの参画を進め、研究科横断型の研究プロジェクト立ち上げの可能性（テーマや体制等）を検討する。</p>	<p>・ FDにおいて外部資金獲得をテーマの一つとして検討した。</p> <p>・ 都市社会文化研究会、持続可能な地域社会研究会を定期的に実施した。</p> <p>・ 研究科横断型の研究プロジェクトの可能性を検討した。</p>	<p>・ 都市社会文化研究科により、博士後期課程学生はもちろん、教員、卒業生の研究交流が深化した。</p> <p>・ 科研費等外部研究費獲得への具体的な動きが進んだ。</p> <p>・ <u>医学研究科等との連携的資金の獲得がなされた（松本教授）。</u></p>	<p>・ 引き続き、科研費非保有者の応募率をのばす工夫のほか、文理融合に関わる研究連携を強化し、大型研究費の獲得を目指す研究環境や教育、異分野との研究交流について構想する必要がある。</p>
C	特色出し	1	<p>・ 学部－大学院一貫教育に向けたカリキュラムの改善が必要。学部クラスターとの関連性や大学院科目の基礎・展開科目の違いが不明瞭となっている点が問題。現在の国際教養学部の学部生（3年生の早期履修生申請希望者を含む）に大学院教育の特徴をイメージしやすいように、学部再編に合わせたカリキュラムの検討が必要。</p> <p>【特色を出す取組】</p> <p>①研究科全体の専門性および研究テーマの構造再検討</p> <p>②学部・大学院教育との連続性向上および科目構成・カリキュラムの改善の検討</p> <p>③早期履修制度の活用促進</p>	<p>・ <u>あり方WGにて、研究科全体の専門性および研究テーマの構造を再検討した。</u></p> <p>・ 学部・大学院教育との連続性向上および科目構成・カリキュラムの改善を検討した。</p> <p>・ 早期履修制度の活用促進を図り、説明会等情報発信を強化した。</p>	<p>・ 出願者獲得を目指し、研究科の構造検討結果を踏まえてホームページおよび研究科案内等を改定した。</p> <p>・ <u>早期履修希望者の獲得増：4名の申請・承認。</u></p>	<p>・ 学部－大学院一貫教育に向けたカリキュラムの改善が必要。</p> <p>・ 学部クラスターとの関連性や大学院科目の基礎・展開科目の違いが不明瞭となっている点が問題。</p> <p>・ 現在の国際教養学部の学部生（3年生の早期履修生申請希望者を含む）に大学院教育の特徴をイメージしやすいように、学部再編に合わせたカリキュラムの検討が必要。</p>

令和7年度自己点検シート <都市社会文化研究科>

※セルの行数、幅は変更自由です。

		Plan	Do	Check	Action	
項目	枝番	令和6年度シート転記「次年度での取組に向けて」	1 取組	5 改善に向けた具体的取組	6 成果	7 次年度の取組に向けて
D 共通課題	1	<p>・留学生教育の問題点を改めて洗い出し、留学生を受け持たない研究科教員も問題点を共有し相互に協力する必要がある。</p>	<p>【グローバル教育】</p> <p>①留学生への教育指導について、実際と課題を共有する。</p> <p>②英語圏以外の留学生受け入れに対する課題（入試共通問題の成果等）を検討する。</p> <p>③大学院在籍期間中の海外留学について、実際と課題を共有し、推奨に努める。</p>	<p>・FDにおいて、テーマの一つとして留学生への指導の実態と課題に関する実施。</p> <p>・入試における共通問題の成果と課題の検証を行った。</p>	<p>・<u>博士後期課程における英語を用いた履修・修了可能性を検討し、課題を明確化できた。</u></p> <p>・入試共通問題の作成方法について、今後のルールを明確化した。</p>	<p>・留学生教育の問題点を改めて洗い出し、留学生を受け持たない研究科教員も問題点を共有し相互に協力する必要がある。</p> <p>・<u>博士後期課程の英語による履修・修了の可能性を高める必要がある。</u></p>
	2	<p>・引き続き人文社会科学系のリカレント講座やプログラムの可能性について議論する。</p> <p>・文理融合や企業との共同研究を引き続き模索する。</p>	<p>【リカレント教育】</p> <p>①研究科の専門性を活かし、アドバンストエクステンション講座を実施。</p> <p>②他研究科の専門とも相互連携するようなプログラムやリカレント講座を検討する。</p>	<p>・アドバンストエクステンション講座を積極的に企画した。</p> <p>・他研究科と連携によるプログラムやリカレント講座を検討した。</p>	<p>・アドバンストエクステンション講座を3講座開講した。</p> <p>・<u>2026年度にDS研究科と連携し、GREENxEXPO運動企画のアドバンストエクステンション講座実施することとなった。</u></p>	<p>・引き続き人文社会科学系のリカレント講座やプログラムの可能性について議論する。</p> <p>・文理融合や企業との共同研究を引き続き模索する。</p>
	3		<p>【<u>大学院の定員超過及び未充足の改善</u>】※<u>研究科のみが対象</u></p> <p>※別紙：令和6年度の収容定員率と入学定員充足率を認証評価共通基礎データ様式にて確認(データは事務局にて作成)するため本欄は記入不要</p>	<p>・あり方WGによって、研究科の専門・学びの構造の見える化について検討した。</p> <p>・情報発信に努め、ホームページ、広報の改善検討し、一部改訂を行った。</p> <p>・あり方WGにて入試結果の検証を行った。</p>	<p>別紙：令和7年度の定員管理と大学院進学率を認証評価共通基礎データ様式にて確認(データは事務局にて作成)するため本欄は記入不要</p>	<p>・出願者の減少傾向が課題。</p> <p>・社会動向を踏まえつつ、ニーズに対応した教育を提供できているか自己点検と改善が必要。</p> <p>・多様な専門性故、構造と個別の専門が見えにくく、引き続きその見える化の検討が必要。</p>

※セルの行数、幅は変更自由です。

項目	校番	令和6年度シート転記「次年度での取組に向けて」	Plan			Do		Check	Action	
			1 取組	2 課題	3 到達目標	4 スケジュール		5 改善に向けた具体的取組	6 成果	7 次年度の取組に向けて
						時期	内容			
A 教育	1		<p><全学共通項目> ※本欄は学部・研究科で追記等不要</p> <p>【教育の質保証・IRとの連携】 大学設置基準に基づく、厳格かつ客観的な成績評価の実施</p> <p>[参考]大学設置基準 (成績評価基準等の明示等) 第二十五条の二(略) 2 大学は、学修の成果に係る評価及び卒業の認定に当たっては、客観性及び厳格性を確保するため、学生に対してその基準をあらかじめ明示するとともに、当該基準にしたがって適切に行</p>	<p><全学共通項目> ※本欄は学部・研究科で追記等不要</p> <p>成績評価に著しい偏りがないか学部・研究科単位で確認し、偏りがある科目については是正の取り組みがされている。なお、成績評価の確認に当たっては、GP (Grade Point) を活用する。</p>	6月	令和6年度後期科目の状況の点検	<p>研究科別成績評価資料を共有し、内容について確認を進めた。各教員については講義科目を中心に、担当科目の成績に関して点検を行った。大学院では学部と比べて定員が少なく、成績分布を設定しづらい(特に博士後期については定員3名)という事情を踏まえながら、次年度についても大学設置基準に基づいた成績付与を継続することとする。</p>	<p>国際総合科学群・医学群それぞれのIRで成績評価の実施状況を分析・確認 ※教学IRにて作成する実施報告書を参照するため本欄は記入不要</p>	<p>大学設置基準に基づいた成績付与を継続する</p>	
					10月	令和7年度前期科目の状況の点検				
A 教育	2		<p>【教育の質向上】 博士前期課程の教育プログラムへのニーズを拡大する。 「ソーシャル・イノベーション研究プログラム」 「YCU EconMastersプログラム」</p>	<p>・博士前期課程における教育プログラムは、24年度に3-2に集約を決定し、25年度新入生から適用 ・プログラムの特徴が、在学生、志願者に十分周知がされていない</p>	4～9月	<p>・新学期オリエンテーションで、プログラムの特徴を周知し、履修科目の選択に役立ててもらおう ・第1回入試説明会で広報</p>	<p>・新学期オリエンテーションで、プログラムの特徴を周知した。 ・第1回入試説明会、第2回入試説明会で広報を行った ・プログラムの申請手続きと修了者数を教授会で周知した</p>	<p>・25年度前期時点で、ソーシャル・イノベーション研究プログラムは6名修了、YCU EconMasters プログラムは2名が修了した ・早期履修生の学部4年次における大学院科目の履修単位数を、従来の10単位から16単位に拡大したことで、博士前期課程入学後に直ちに修士論文に取り組みめるような環境を整備した</p>	<p>・早期履修生の学部4年次における大学院科目の履修単位数について、引き続き検討を行う ・博士前期課程の教育プログラム「ソーシャル・イノベーション研究プログラム」「YCU EconMastersプログラム」推進のため、学部と大学院の連携を進める</p>	
					10～3月	<p>・第2回入試説明会で広報 ・前期分の修了者数を教授会で周知</p>				
	3	<p>・博士後期課程の開講科目について引き続き検討を行う。</p>	<p>【教育の質向上】 ・博士学位取得に向けて、学生のニーズに合った科目群を検討する ・博士後期課程の在学者数が近年増加しており、博士号取得に向けた情報共有を進める ・博士後期課程学生のキャリアパスの拡充を図り、学内外に広報を行うことで、卒業生の大学院進学を支援する</p>	<p>・博士号取得に向けたスケジュール、必要要件の周知が十分でない ・博士号取得後にアカデミックジョブを目指す学生を対象とした教育能力養成システムが不十分である ・卒業生を対象とした大学院進学の情報発信が不十分である</p>	4～9月	<p>・入試教務委員会で、学生ニーズについて、博士後期課程の主指導教員からヒアリングを行う ・博士号取得に向けた情報共有の仕組みを検討する ・博士後期課程学生が学部授業を経験できる仕組みを検討する</p>	<p>・入試教務委員会で、学生ニーズについて、博士後期課程の主指導教員からヒアリングを行う ・博士号取得に向けた情報共有の仕組みを検討する ・博士後期課程学生が学部授業を経験できる仕組みを検討する</p>	<p>・R7年度は、博士号申請者3名、博士後期課程中間報告申請者5名と、近年においては最大数であり、取容定員充足率の改善に寄与することが見込まれる ・SPRING第1回募集において、博士前期課程在学者2名が採用された。 ・博士号取得に向けた学生ニーズに応えるため、博士後期課程指導資格審査と非常勤の活用により、R8年度博士後期課程の科目を増加させた ・博士予備審査における提出論文について整理を行った</p>	<p>・博士号取得に向けた情報共有の仕組みを整備する</p>	
					10～3月	<p>・26年度の科目開講について準備を進める ・26年度の科目開講について、学生ニーズを踏まえながら調整を行った</p>				
B 研究	1		<p>【研究力の向上】 ※研究科のみ記入 融合研究(学内、学外、国際)をさらに進める ・国際マネジメント研究科教員は、各々の専門分野で活発な研究活動を行っているが、研究の質をさらに向上させるための検討を行う。</p>	<p>・学内の他研究科(医学研究科、データサイエンス研究科等)、学外の同じ学問領域、国際展開など、これまで試みられなかった方法にチャレンジする。</p>	4～9月	<p>・入試教務委員会で、教員の研究湯活動に関するヒアリングを行う</p>	<p>・入試教務委員会で、教員の研究活動に関するヒアリングを行った</p>	<p>・SIMBA担当教員を中心に、他研究科との研究面での連携が行われた</p>		
					10～3月	<p>・新たなチャレンジに関して、都度、教授会等で情報共有を行う</p>				
	2	<p>【研究力の向上】 ・教員の研究業績をさらに周知する仕組みを整備する。 ・国際マネジメント研究科所属教員の研究力の学内外への周知を進める</p>	<p>・国際マネジメント研究科在学生は2024年度に査読付き国際学術雑誌に3件が掲載されるなど、成果を挙げている ・国際マネジメント研究科所属教員についても、活発な研究を行いアウトプットを出しているが、教育、研究、学内外の業務多忙により、研究成果の広報が不十分である</p>	4～9月	<p>・ResearchMapへの頻回の登録を、教授会で周知 ・前期末時点で、研究成果をとりまとめ</p>	<p>・ResearchMapへの頻回の登録を、教授会で周知した ・研究成果の共有を教授会で進めた</p>	<p>・教授会において、教員の顕著な研究活動について報告を行った(2件) ・教員の研究力強化に向けて引き続き検討を行い、具体的な取り組みを行う</p>			
				10～3月	<p>・教授会で、前期末時点の研究成果を共有 ・学内関係部署と共有</p>					
	3		<p>【研究力の向上】 ※研究科のみ記入 教員の研究力の向上に資する課題を明らかにする ・教員の研究時間の確保のため、事務業務の効率改善、教育体制の体系化等が必要(継続)</p>	<p>・教員の研究時間確保のための具体的な取り組み(例えば教育のDX化)の検討がスタートしている</p>	4～9月	<p>・入試教務委員会で、事務業務の課題、改善案に関してヒアリングを行う(例:学位申請時の提出物) ・入試教務委員会で、教育体制について主指導教員からヒアリングを行う(例:研究倫理教育、AI活用)</p>	<p>・学位申請時の提出書類のうち、従来、押印・署名が必要とされていたものを、提出時のメール送信方法をルール化することで、不要とした ・ヒアリング結果をとりまとめ、学内担当部署等と共有</p>	<p>・R8年度から、学生の学位申請時における提出書類が一部簡素化(審査書類の押印廃止、修了証明書、博士予備発表申請時の履歴書)されることで、指導教員の負担軽減が実現した</p>		
					10～3月					

※セルの行数、幅は変更自由です。

項目	校番	Plan				Do		Check	Action										
		1 取組	2 課題	3 到達目標	4 スケジュール		5 改善に向けた具体的取組	6 成果	7 次年度取組に向けて										
					時期	内容													
C 特色出し	1	<p>・社会人を対象とした大学院教育の取組を進める。科目等履修生制度の活用をはかる。</p> <p>・博士後期課程学生のキャリアパス構築を検討する。</p>	<p>【特色を出す取組】</p> <p>・社会人のリカレント教育を推進する。博士前期課程のSIMBAプログラムについては、昨年度、社会人特別選抜入試をSIMBA専用入試と位置づけた。</p>	<p>・社会人を対象とした大学院教育として、特に正規生の増加をめざした取組を進める。</p>	<p>・社会人の大学院進学へのブリッジとして、科目等履修生制度等の活用を検討する</p> <p>・社会人向けに、平日夜間、あるいは週末の開講科目を検討する</p>	4～9月	<p>・入試説明会で、博士後期課程を志望する社会人学生に、現状と課題に関するヒアリングを行う</p>	<p>・入試説明会で、博士後期課程を志望する社会人学生に、現状と課題に関するヒアリングを行う</p>	<p>・博士後期課程入試において、社会人の受験があった。</p> <p>・SIMBAプログラムを中心とした社会人大学院生の活躍について情報発信を行う</p>										
						10～3月	<p>・教授会で、前期末時点の研究成果を共有</p> <p>・学内関係部署と共有</p>			<p>・教授会で、前期末時点の研究成果を共有</p> <p>・学内関係部署と共有</p>									
						4～7月	<p>WEBページやリーフレットの掲載メッセージのアップデート</p>				<p>・WEBページで発信の強化を行った</p>								
						4～8月	<p>YCU医療経営・政策プログラムとの連携強化、対面イベント企画とSIMBAの応募者の拡充</p>					<p>・ソーシャル・イノベーション研究会を合同で開催した</p>							
	7～8月	<p>研究開発型オープンイノベーター育成プログラムの対面イベントでの周知</p>	<p>・対面イベントで周知を行った</p>																
	4～3月	<p>修士生への働きかけと査読対応支援、投稿先となる論文誌リストの整備</p>		<p>・修士論文の投稿について働きかけを行った</p>															
	4～8月	<p>① 教育・研究リソースの拡充に応じて、応募者の属性や関心領域を多様化したい</p> <p>② 研究成果の発表が修士論文とどまっており、社会への知識還元が十分でない（継続）</p>			<p>① 医療経済評価（HTA）や医療ビッグデータ、公共マネジメントに関心のある応募者の拡充</p> <p>② 論文投稿数の向上</p>	<p>・社会人特別選抜（SIMBA入試）では8名の志願者があった（過去最大数）。3名は医療経営・政策プログラム以外からのルートであり、口コミや教員の研究成果などを通じて受験していた。</p> <p>・修士生の学び直しなどにつながる機会を提供し、修士生とのネットワークを強化する。</p>													
	4～9月	<p>・25年度入試より導入した、博士前期課程における外国籍志願者の出願資格の変更（日本語能力試験N1合格証明書の提出を必須、英語での受験や、日本の高校・大学・大学院卒業は除く）によって、外国籍の出願者数が減少する一方で、全般的な受験生の質は確保された。この傾向が今後も続くかを注視する</p>					<p>・26年度入試における外国籍の受験者数が、25年度入試と同水準であること</p>	<p>・入試説明会等において出願要件の変更の周知を行う</p>	<p>・入試説明会等において出願要件の変更の周知を行った</p> <p>・出願書類の整理（厳封処理等）を行い、海外大学出身の利便性の向上に配慮する取り組みを行った</p> <p>・第1期入試（10月実施）の日程の検討を行った</p>	<p>・博士前期課程においては10月入試、2月入試、博士後期課程の両方において、前年度を上回る志願者数があった</p> <p>・9月からスタートする、学内推薦・5年一貫入試、第1期入試の日程が現時点では適切であることを確認の上、27年度入試日程を決定した</p>									
D 共通課題	2	<p>【リカレント教育】</p> <p>同上（C1）</p>																	
				3												<p>【大学院の定員超過及び未充足の改善】※研究科のみが対象</p> <p>※別紙：令和6年度の収容定員率と入学定員充足率を認証評価共通基礎データ様式にて確認(データは事務局にて作成)するため本欄は記入不要</p>	<p>【令和6年度の収容定員充足率が100%～120%以外の場合に記載。また、令和6年度の入学定員充足率が100%未満の場合に記載】博士前期課程の収容定員充足率が昨年度から98%であることに加え、さらに今年度は昨年度プラスであった入学定員充足率も減少となり、特に博士後期課程においては167→67%に大幅減少</p>	<p>【令和6年度の収容定員充足率が100%～120%以外の場合に記載。また、令和6年度の入学定員充足率が100%未満の場合に記載】収容定員充足率と入学定員充足率の定義とその水準について、研究科に属する教員が理解をしていること。</p>	<p>通年</p> <p>入試説明会等を中心に広報活動を進める。博士後期課程については、博士号取得に向けた、教員と学生へのサポート体制を検討する</p>

(物質システム科学専攻・生命環境システム科学専攻)

※セルの行数、幅は変更自由です。

項目	枝番	Plan				Do		Check	Action	
		令和6年度シート転記「次年度での取組に向けて」	1 取組	2 課題	3 到達目標	4 スケジュール		5 改善に向けた具体的取組	6 成果	7 次年度への取組に向けて
						時期	内容			
A 教育	1	<p>令和6年度シート転記「次年度での取組に向けて」</p>	<p><全学共通項目> ※本欄は学部・研究科で追記等不要</p> <p>【教育の質保証・IRとの連動】 大学設置基準に基づき、厳格かつ客観的な成績評価の実施</p> <p>[参考]大学設置基準 (成績評価基準等の明示等) 第二十五条の二(略) 2 大学は、学修の成果に係る評価及び卒業の認定に当たっては、客観性及び厳格性を確保するため、学生に対してその基準をあらかじめ明示すると</p>	<p><全学共通項目> ※本欄は学部・研究科で追記等不要</p> <p>成績評価に著しい偏りがないか学部・研究科単位で確認し、偏りがある科目については是正の取り組みがされている。なお、成績評価の確認に当たっては、GP (Grade Point) を活用する。</p>	6月	令和6年度後期科目の状況の点検	<p>・最新の研究科の状況を踏まえ、研究科3ポリシーの微修正に向けて作業を進めている。 ・研究科会議および専攻会議において、各科目の GP 分布を共有した。</p>	<p>国際総合科学群・医学群それぞれのIRで成績評価の実施状況を分析・確認 ※教学IRにて作成する実施報告書を参照するため本欄は記入不要</p>	<p>・最新の研究科3ポリシーを研究科メンバーへ周知し、必要に応じて3ポリシーに基づく授業・入試の改善を実施する。 ・引き続き、各科目の GP 分布について情報共有を行う。</p>	
					10月	令和7年度前期科目の状況の点検				
A 教育	2	<p>1.理学部と理学系大学院のグランドデザイン会議を通じた継続的な情報共有 2.学部教育(AI教育)との連携強化・早期履修者数の増加・研究を軸とした教育に向けた取り組み</p>	<p>【教育の質向上】 1.グランドデザイン会議を通じ、理学部と理学系大学院との連携協議を継続する。 2.将来構想に基づき、理学部と連携し、AI教育を含めたカリキュラムの見直しを図る。学部生の大学院科目の早期履修を推奨し、大学院進学時の学生の基礎学力の向上を図る。</p>	<p>1.教員の入れ替えもあり、一部、専門分野に基づいた部門制が構築できている。 2.理学部と連携したAI教育の体系的なカリキュラムの導入されていない。早期履修受講者数が微増である。</p>	通年	1.グランドデザイン会議の開催	<p>1.グランドデザイン会議を毎月1回定期的に開催し、理学部および生命医学研究科との意見交換を行った。特別研究・特別演習の単位分割について議論を進めた。 2.早期履修制度説明会を2回開催し、学部3年生を対象とした学内向け入試説明会を実施した。</p>	<p>1.理学部および理系研究科の各キャンパスにおける現状・課題・将来計画を共有することができた。また、単位分割を行うことで、学生の学修状況をより定期的に評価できると判断した。 2.早期履修者数は昨年度の45名から58名へと増加した。学内向け入試説明会では、大学院学生の講演に対して活発な質疑が行われ、学生の関心の高さがうかがえた。</p>	<p>1.グランドデザイン会議を通じて継続的な情報共有を行う。単位分割による成績評価の運用を着実に進める。 2.学部教育(AI教育)との連携を強化し、早期履修者数の増加につなげる。また、研究を軸とした教育体制の構築に向けた取り組みを推進する。</p>	
					9月	2.学内向けの大学院入試説明会の開催				
					1月	2.早期履修制度説明会の開催				
					4月・1月	2.推薦入試説明会の実施				
B 研究	1	<p>1.研究紹介セミナーの継続的な実施と教員交流の場の提供 2.研究力強化に向けた重点分野創出や共同研究推進等の体制構築 3.研究倫理およびハラスメントの防止に向けた教育の継続的な実施</p>	<p>【研究力の向上】※研究科のみ記入 1.研究セミナーなどを通して教員間の共同研究を推進し、将来的な重点分野の創出につなげる。 2.各専攻の特徴的な分野を支援、アピールするとともに、理学部全体を支える基礎分野の底上げを図る。様々な畜片の研究費を申請する【研究推進との協力体制】 3.研究指導、研究環境等に関する課題点を洗い出し、改善を図る。</p>	<p>1.2.学際的、融合的分野の研究を推進していく必要がある。応募できる研究費を開拓する必要がある。研究成果を十分に広報していない。 3.研究指導・研究倫理に関する課題点を共有し、議論していく必要がある。</p>	通年	1.2.研究紹介セミナーの継続的な実施	<p>1.理学部および理系研究科教員間の交流促進を目的として、若手教員に加え、ベテラン教員による研究紹介セミナーを理学部と共同で開催した。 2.重点分野創出に向け、研究教授および卓越教員に関する情報共有を行った。 3.大学院オリエンテーションおよび必修科目において、研究倫理およびハラスメントに関する講義を実施した。</p>	<p>1.セミナーの実施により、教員・学生間の議論の場を提供することができ、共同研究へ発展する事例も見られた。 2.研究教授および卓越教員の候補者に対して推薦を行った。 3.研究不正を含む研究倫理教育の重要性について、教員・学生間で共通理解を深めることができた。</p>	<p>1.研究紹介セミナーの継続的な実施と教員交流の場の提供を通じて、研究力強化に向けた共同研究推進のための体制構築を進める。 2.引き続き重点分野の創出を行う。 3.研究倫理およびハラスメント防止に向けた教育を継続的に実施する。</p>	
					通年	1.2.応募できる研究費の情報を収集				
					年2回	3.生命ナノシステム科学総論での講義				
					通年	3.研究室での研究倫理を含む学生指導を行う				
					年4回	3.副指導教員との面談				
C 特色出し	1	<p>1.博士後期課程のダブルデグリー制度の具体的検討 2.博士前期・博士後期課程の志願者数・入学者数増加のため、特に内部進学者数増加に向けた取り組み 3.社会人博士を見据え、研究力強化に伴う、産学連携に向けた取り組み</p>	<p>【特色を出す取組】 1.博士後期課程のダブルデグリーに向けた制度を検討する【グローバルとの連携】。 2.優秀な博士前期・博士後期課程学生育成のための早期修了プログラムやSPRING制度広報の充実。博士後期課程進学の重要性を説明する【キャリア支援との連携】。 3.社会人博士を見据え、学位審査基準の確認および見直しや秋入学の実施を検討する【学務・教務、アドミとの連携】。同時に産学連携や共同研究の推</p>	<p>1.本学では、博士後期課程のダブルデグリー制度が存在しない。 2.SPRING制度や博士後期課程進学の重要性が十分に浸透していない。 3.学位審査論文は慣例的に主論文と副論文から構成されている。社会人早期修了プログラムも同様の学位審査基準となっている。また秋入学制度も存在しない。そのため、現状では優秀な社会人博士を獲得するのが困難な場合がある。</p>	通年	1.ダブルデグリー制度実現のためのWG開催	<p>1.チェンマイ大学と、博士後期課程におけるダブルデグリープログラム構築に向けて具体的な検討を行った。 2.一般向け入試説明会(4月・9月)、および学内向け推薦入試制度説明会(4月)と入試説明会(9月)を実施し、SPRING事業を含む大学院進学の魅力を発信した。 3.社会人博士の9月入学制度を検討した。学位審査基準について、専攻会議、運営会議、代議員会において意見交換を行った。</p>	<p>1.複数回のオンラインミーティングおよびチェンマイ大学への現地視察を実施し、博士後期課程におけるダブルデグリープログラム制度を構築した。 2.博士前期課程の志願者数は昨年度とほぼ同水準であったが、SPRING制度の効果により博士後期課程の志願者数が増加した。 3.社会人博士の9月入学制度を構築した。また社会人博士の在籍により、産学連携の実績が拡大した。</p>	<p>1.チェンマイ大学との博士後期課程におけるダブルデグリープログラムを実施する。 2.博士前期・博士後期課程の志願者数および入学者数の増加に向け、特に内部進学者の確保に重点を置いた取り組みを進める。 3.研究力強化を踏まえ、産学連携の推進に向けた取り組みを進める。</p>	
					4月・9月	2.入試説明会の実施(学内向けの説明会も開催する)				
					4月・1月	2.推薦入試説明会の実施				
					通年	2.HPなどによるSPRING制度、早期修了制度の案内				
					通年	3.秋入学および学位審査基準の見直し検討				

(物質システム科学専攻・生命環境システム科学専攻)

※セルの行数、幅は変更自由です。

項目	枝番	Plan				Do		Check	Action
		1 取組	2 課題	3 到達目標	4 スケジュール		5 改善に向けた具体的取組	6 成果	7 次年度への取組に向けて
					時期	内容			
D 共通 課題	1	<p>令和6年度シート転記「次年度での取組に向けて」</p> <p>1. 研究力強化に基づいた国際化教育の継続的な実施 1a. (C-1の再掲)博士後期課程のダブルデGREE制度の具体的検討 1b. 海外FWや、JSPS、JST (さくらサイエンスやNEXUS) を利用した国際交流のさらなる推進 2. 専門英語科目の拡充</p>	<p>【グローバル教育】</p> <p>1a. (C-1の再掲)博士後期課程のダブルデGREEに向けた制度を検討する【グローバルとの連携】。 1b. 個々の教員の共同研究先の大学や研究所を介して国際化教育を実施し、協定校の拡充・実質的な国際共同研究活動を推進する。 2. 専門分野に合った英語科目（特講）を拡充する。</p>	<p>1a. (C-1の再掲)本学では、博士後期課程のダブルデGREE制度が存在しない。 1b. 協定校の拡充や実質的な国際共同研究活動が必要である。一昨年度、4年ぶりに対面で実施した国際リトリートの参加人数が少ない。 2. 専門分野に合った英語講義科目の拡充が必要である。</p>	<p>1a. (C-1の再掲)博士後期課程にダブルデGREEを導入することで、優秀な留学生を受け入れる。 1b. 海外FWを通した国際リトリートの参加人数が増えている。海外連携大学や実質的な国際共同研究が増加している。 2. 専門英語講義科目も増え、双方向による国際化教育が行われている。</p>	<p>通年</p> <p>1a. ダブルデGREE制度実現のためのWG開催</p> <p>通年</p> <p>2. 専門英語講義科目の開講</p> <p>8月</p> <p>1b. 国際リトリートの実施</p>	<p>1. 研究科として JST NEXUS に申請し、台湾・タイでの国際リトリートを実施するとともに、SPRING 事業との共同で国際シンポジウムを開催した。 2. 専門英語科目を早期履修の学部生にも開放し、国際化科目の拡充を図った。</p>	<p>1. 研究科として申請していた JST NEXUS が採択され、国際リトリートおよび国際シンポジウムを開催し、英語による研究成果発表の対面機会を創出した。 2. 専門英語科目を学部生にも開放し、英語教育の充実を図った。</p>	<p>1. 国際化教育を継続的に実施し、海外フィールドワークやJSPS・JST (さくらサイエンス、NEXUS など) を活用した国際交流をさらに推進する。また、外国人留学生の受入れに向けた具体的な方策を検討する。 2. 博士後期課程ダブルデGREEプログラムの実施に向け、講義・シラバス等を英語のみで履修・修了できる環境を整備する。</p>
	2	<p>近隣のSSH指定高校等や、博士後期課程学生に対して、最先端の研究を通じたりカレント教育を実施</p>	<p>【リカレント教育】</p> <p>近隣のSSH指定高校等や、博士後期課程社会人学生に対して、最先端の研究を通じたりカレント教育を実施</p>	<p>近隣のSSH指定高校との連携不足。博士後期課程の秋入試がない。</p>	<p>近隣のSSH指定高校（サイエンスフロンティア高校・横浜緑ヶ丘高校）とのスムーズな連携。博士後期課程の秋入学が実施される。</p>	<p>通年</p> <p>SSH指定高校との議論</p> <p>通年</p> <p>博士後期課程秋入学の検討</p>	<p>近隣の SSH 指定校（サイエンスフロンティア高校・横浜緑ヶ丘高校）の教員を対象に、自主研究を通じたりカレント教育を実施した。また、近隣の中学・高校教員が博士後期課程に在籍し、最先端の研究を通じたりカレント教育を受ける機会を提供した。</p>	<p>近隣の SSH 指定高校の教員と協働し、生徒を対象とした課題研究を実施した。また、博士後期課程に在籍する中学・高校教員が、学んだ最先端の技術を中等教育へフィードバックする形でリカレント教育を推進した。</p>	<p>引き続き、近隣の SSH 指定高校等および博士後期課程の学生に対し、最先端の研究を通じたりカレント教育を実施する。</p>
	3	<p>博士前期・博士後期課程の志願者数、入学者数増加のため、特に内部進学者数増加に向けた取り組みを継続実施</p>	<p>【大学院の定員超過及び未充足の改善】 ※研究科のみが対象 ※別紙：令和6年度の収容定員率と入学定員充足率を認証評価共通基礎データ様式にて確認(データは事務局にて作成)するため本欄は記入不要</p>	<p>昨年度より増加傾向ではあるが、入学定員を十分に満たしていない。(C-1より) 大学院生活や大学院修了後のキャリアなどについて実際の情報が少ない。</p>	<p>社会人を含め学生定員の充足率が満たされている。</p>	<p>4月・9月</p> <p>入試説明会の実施 (年2回)</p> <p>4月・1月</p> <p>推薦入試説明会の実施</p> <p>通年</p> <p>HPなどによるSPRING制度、早期修了制度の案内</p> <p>通年</p> <p>学部生へ向けた大学院生による大学院生活・キャリア紹介等</p> <p>前期</p> <p>オリエンテーションや必修講義における博士後期課程進学への紹介</p>	<p>1. オリエンテーションや入試説明会において SPRING 制度を紹介した。 2. 必修科目の初回授業で、博士後期課程や留学制度等について周知を行った。 3. 大学院生の研究成果や受賞に関する広報活動を推進した。 4. 早期履修制度説明会を2回開催し、学部3年生を対象とした学内向け入試説明会を実施した(再掲)。</p>	<p>別紙：令和7年度の定員管理と大学院進学率を認証評価共通基礎データ様式にて確認(データは事務局にて作成)するため本欄は記入不要</p>	<p>引き続き、博士前期・博士後期課程の志願者数および入学者数の増加に向け、特に内部進学者の確保に重点を置いた取り組みを継続して実施する。</p>

※セルの行数、幅は変更自由です。

項目	枝番	Plan			Do		Check	Action							
		1 取組	2 課題	3 到達目標	4 スケジュール	5 改善に向けた具体的取組	6 成果	7 次年度の取組に向けて							
A 教育	1	令和6年度シート転記「次年度での取組に向けて」	<p><全学共通項目> ※本欄は学部・研究科で追記等不要</p> <p>【教育の質保証・IRとの連動】 大学設置基準に基づく、厳格かつ客観的な成績評価の実施</p> <p>[参考]大学設置基準 (成績評価基準等の明示等) 第二十五条の二 (略) 2 大学は、学修の成果に係る評価及び卒業の認定に当たっては、客観性及び厳格性を確保するため、学生に対してその基準をあらかじめ明示するとともに、当該基準にしたがって適切に行う。</p>	<p><全学共通項目> ※本欄は学部・研究科で追記等不要</p> <p>成績評価に著しい偏りがないか学部・研究科単位で確認し、偏りがある科目については是正の取り組みがされている。なお、成績評価の確認に当たっては、GP (Grade Point) を活用する。</p>	<p>時期</p> <p>6月</p> <p>10月</p>	<p>内容</p> <p>令和6年度後期科目の状況の点検</p> <p>令和7年度前期科目の状況の点検</p>	<p>博士前期課程、博士後期課程それぞれにおいて、成績評価及びGPの割合・平均値の分布状況を確認した。</p> <p>理系研究科の中で比較した場合、成績評価・GPが博士後期課程では高い一方、博士前期課程では低い傾向にあるが、年度により変動していることから、客観的な評価が概ね実施されている。</p>	<p>国際総合科学群・医学群それぞれのIRで成績評価の実施状況を分析・確認</p> <p>※教学IRにて作成する実施報告書を参照するため本欄は記入不要</p>	<p>成績評価の際に相対評価であることは必須ではないことを確認の上で、授業の難易度によって成績にばらつきが生じ、受講生が優秀であれば高い評価が付く割合が高くなると考えられる点を考慮し、授業設計に取り組む。</p>						
		2	<p>・アンケート結果を分析し、さらなる教育改善につなげるとともに、学位論文の質担保に向けて基準を整理する。</p> <p>・授業形式については、対面とオンラインそれぞれの利点を活かし、科目内容もふまえながら併用する。</p>	<p>【教育の質向上】</p> <p>・博士前期課程の修士研究評価のあり方を検討する。</p> <p>・副指導教員面談を活用し、研究活動を円滑に行うよう支援する。</p>	<p>・研究活動と就職活動との両立が難しい状況となっている。</p>	<p>・オリエンテーション、履修指導を参考に、各学生がカリキュラムに沿って適切に履修、評価されている。</p>	<p>4月</p> <p>5月,10月,12月,2月</p> <p>5月,11月</p> <p>5月-12月</p>	<p>オリエンテーション等で履修指導</p> <p>副指導教員定期面談</p> <p>授業評価アンケートのフィードバック</p> <p>修士研究評価に関する議論</p>	<p>オリエンテーションでの履修指導、副指導教員面談、授業評価アンケートのフィードバックを実施した。</p> <p>博士前期課程、後期課程ともに特別研究・演習科目の単位分割について議論し、カリキュラム改正を行った。</p>	<p>科目の単位分割により、段階的に進められる研究指導における学生の取組を定期的に評価することが可能となり、学生の主体的な学びと研究意欲の向上を促す成果が期待できる。</p>	<p>令和8年度入学から適用する、新しい特別研究・演習科目の成績評価運用を確実に行う。</p>				
			B 研究	1	<p>・研究倫理や安全管理に関する取組、及び副指導教員面談を活用した多面的な支援を行い、公正な研究活動を推進する。</p> <p>・論文保管サーバの今後の運用について、オープンアクセス加速化事業とも連携しながら検討する。</p>	<p>【研究力の向上】※研究科のみ記入</p> <p>・産学連携、国際的な機関と連携した共同研究を推進する。</p> <p>・研究成果の積極的な広報・発信を行う。</p> <p>・SPRING事業と連携した大学院生の研究力強化を図る。</p> <p>・研究倫理に関するプログラム、周知を実施する。</p>	<p>・論文投稿料の高騰に伴い、十分な支援ができていない。</p> <p>・研究倫理に対する学生の意識に差がある。</p> <p>・研究科内における研究内容の共有と連携体制の構築が必要である。</p>	<p>・大学院生を含めた研究成果が迅速に発信できている。</p> <p>・SPRING事業採択学生数:10名以上</p>	<p>4月</p> <p>5月-7月</p> <p>6月</p> <p>10月</p> <p>11月</p>	<p>オリエンテーションで安全管理に関する講習の実施</p> <p>eラーニング(eAPRIN)の受講</p> <p>理研安全管理講習の実施</p> <p>科目内で外部講師による研究倫理教育の実施(前期課程1年)</p> <p>必修科目内で研究不正・研究倫理をテーマにしたディスカッションの実施(博士後期1年)</p>	<p>新入生オリエンテーションを中心に、安全管理、遺伝子組換え、動物実験、放射線施設に関する講習を、学生の研究内容に応じて受講した。</p> <p>新入生向けeラーニング、博士前期課程・博士後期課程の1年次必修科目での外部講師による研究倫理教育・ディスカッションを実施した。</p> <p>SPRING事業採択者は、のべ14名に達した。</p>	<p>研究室に配属された学部3年次生にも各種講習を実施し、大学院進学後にも適切な研究活動のための知識やルールの習得機会を設けた。</p> <p>世界の著名ジャーナルに論文が掲載された教員に対し、論文投稿料の補助を行った。</p>	<p>SPRING事業採択者は確実に増加しており、学振等によりSPRINGによる補助を辞退した枠に次の候補者が採択される好循環を維持していく。</p> <p>キャンパス内論文保管サーバにかかわるGakunin RDMの導入が進んでおり、適切な活用を推進する。</p>		
					C 特色出し	1	<p>・医理連携協議会を通じて、取組の共有及び意見交換をより活発に行う。</p> <p>・「バイオフィーマティクス」や医理連携セミナーを継続する。</p>	<p>【特色を出す取組】</p> <p>・医理連携協議会を通じ、情報共有や課題解決を通じた意見交換と連携体制を構築する。</p> <p>・セミナー情報の共有及び教員の交流機会を創出する。</p> <p>・医学研究科「バイオフィーマティクス特講」に加え「バイオフィーマティクス実践」も他研究科開講科目として修了単位へ算入する。</p>	<p>・医理連携専任教員の定年時期が近く、なっており、継続性ある実施体制の構築が必要である。</p> <p>・他研究科科目の履修について、関係部署との情報共有を図り、内容変更が発生時等の周知徹底が必要である。</p>	<p>・学生や教員が交流する機会を設け、相互理解が深まり連携しやすい環境にする。</p> <p>・「バイオフィーマティクス特講」「バイオフィーマティクス実践」の目標単位修得者数:3名程度</p>	<p>5月-7月</p> <p>6月,10月,2月</p> <p>7月,11月</p> <p>10月-12月</p>	<p>「バイオフィーマティクス実践」開講</p> <p>医理連携協議会</p> <p>医理連携セミナー</p> <p>「バイオフィーマティクス特講」の開講</p>	<p>選択科目として「バイオフィーマティクス実践」「バイオフィーマティクス特講」を開講した。</p> <p>6月/10月/3月:医理連携協議会を開催し、取組事例の共有や意見交換を実施した。</p> <p>7月/11月:生命医科学研究科、医学研究科教員による医理連携セミナーを実施した。</p>	<p>医理連携協議会では、研究交流や学生指導に関するテーマを中心とした意見交換を行った。</p> <p>医理連携セミナーは両研究科における授業の特別回として、学生及び他キャンパスを含む教職員合計で7月は150名、11月は75名が受講し、バイオフィーマティクス特講は大学院生2名が履修した。</p>	<p>医理連携協議会では、学生指導及び研究連携に関する取組の共有及び意見交換をより活発に行う。</p> <p>医理連携セミナーでは、参加学生数の増加に取り組む。</p>

※セルの行数、幅は変更自由です。

項目	枝番	Plan				Do		Check	Action	
		1 取組	2 課題	3 到達目標	4 スケジュール		5 改善に向けた具体的な取組	6 成果	7 次年度の取組に向けて	
					時期	内容				
D 共通課題	1	<p>令和6年度シート転記「次年度での取組に向けて」</p> <ul style="list-style-type: none"> YCUグローバル方針に則り、引き続き外国人学生の受入を行う。 引き続き、海外の大学や研究所等との共同研究を積極的に実施し、研究成果発信につなげる。 	<p>【グローバル教育】</p> <ul style="list-style-type: none"> YCUグローバル方針に則り、博士後期課程の秋入学に関する検討を行う。 国際共同研究等の取組促進や世界で活躍する研究者を招へいたセミナーを実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> 入試回数増加に伴う、従事要員の確保が課題となる。 提携先の開拓、調整に関する戦略が必要となる。 	<ul style="list-style-type: none"> 博士後期課程の秋入学制度実施に向けて議論を整理する。 海外大学、研究所に所属する研究者とのオンラインセミナーを実施し、積極的に学生の参加を促す。 	<p>4月,9月</p> <p>4月-12月</p> <p>7月-3月</p>	<p>研究生受入</p> <p>博士後期課程秋入学に関する議論</p> <p>海外研究者とのオンラインセミナーを実施</p>	<p>国費外国人研究生の指導を実施した。</p> <p>博士後期課程の秋入学について議論し、令和8年度からの実施を決定した。</p> <p>博士後期課程1年次必修科目で外国籍ゲスト講師を招へいた科学英語プレゼンテーションに関する授業を実施した。</p>	<p>秋季入学は、国籍を問わず受験可能であり、グローバル化の取組の一環となることが期待される。</p> <p>受入中の国費研究生1名は、博士後期課程に進学予定である。</p>	<p>令和8年度より実施の博士後期課程秋季入学試験を確実に実施する。</p> <p>引き続き、海外の大学や研究所等との共同研究を積極的に実施し、研究成果発信につなげる。</p>
	2	<ul style="list-style-type: none"> DSリカレントプログラムの受講について周知を図る。 リカレント科目の開講について準備と広報を進める。 	<p>【リカレント教育】</p> <ul style="list-style-type: none"> 企業や研究機関で研究を行う社会人が博士後期課程進学の契機となるよう、総論科目を開放する方向で準備を進める。 研究科学生の研究内容に応じて、DSリカレントプログラムの受講を推奨する。 	<ul style="list-style-type: none"> 単独研究科で多くのプログラムを準備・運営することが困難である。 	<ul style="list-style-type: none"> 「生命医科学総論Ⅰ/Ⅱ」をR8年度に授業開放科目として提供するための準備ができています。 研究科在学生のDSリカレントプログラム受講者数：1名以上 	<p>4月-7月</p> <p>4月-2月</p> <p>8月-1月</p>	<p>「生命医科学総論Ⅰ/Ⅱ」の授業録画</p> <p>DSリカレントプログラム開講</p> <p>「生命医科学総論Ⅰ/Ⅱ」のR8年度授業開放準備</p>	<p>博士前期課程必修科目「生命医科学総論Ⅰ/Ⅱ」の授業を試行的に録画し、リカレント科目として開放可能かについて検証した。</p> <p>DSリカレントプログラムは2名が履修した。</p>	<p>「生命医科学総論Ⅰ/Ⅱ」については、特許及び著作権の観点からの課題があり、正規履修生へ最新の研究成果を提供するという授業目的とのバランスについて検討する契機となった。</p>	<p>「生命医科学総論Ⅰ/Ⅱ」は引き続き講義を録画しリカレント講座としての開講を検討するとともに、科目等履修科目としての開放を行う。</p>
	3		<p>【大学院の定員超過及び未充足の改善】※研究科のみが対象</p> <p>※別紙：令和6年度の収容定員率と入学定員充足率を認証評価共通基礎データ様式にて確認(データは事務局にて作成)するため本欄は記入不要</p>	<ul style="list-style-type: none"> 博士前期課程は入学定員充足率が100%未満であり、以前より低下傾向にある。 博士後期課程は収容定員充足率が140%超となっており、以前より上昇傾向にある。 	<ul style="list-style-type: none"> 博士前期課程は、入試広報を強化し令和8年度入試(令和7年度実施)において、入学定員充足率を引き上げることを目標とする。 博士前期課程・博士後期課程ともに、定員実績を経年分析し、適正な定員について議論する。 	<p>5月,6月,9月</p> <p>7月,8月,11月,1月</p> <p>11月-3月</p>	<p>入試説明会</p> <p>研究科入試</p> <p>定員充足実績に関する分析</p>	<p>入試説明会・試験日程を前倒しし、他大学との日程重複を在籍者を含め参加者・受験者が増加した。</p> <p>博士後期課程については、社会人学生を中心に定員を上回る受験があった。</p>	<p>別紙：令和7年度の定員管理と大学院進学率を認証評価共通基礎データ様式にて確認(データは事務局にて作成)するため本欄は記入不要</p>	<p>博士後期課程については、秋季入学の開始とあわせて研究力向上を見据え、定員のあり方について議論を進める。</p> <p>博士前期課程については、引き続き適切な入試説明会・試験日程も検討しながら定員充足率向上に取り組む。</p>

令和7年度自己点検シート <データサイエンス研究科>

※セルの行数、幅は変更自由です。

項目	技 番	Plan				Do		Check	Action	
		令和6年度シート転記「次年度での取組に向けて」	1 取組	2 課題	3 到達目標	4 スケジュール		5 改善に向けた具体的取組	6 成果	7 次年度の取組に向けて
						時期	内容			
A 教 育	1		<p><全学共通項目> ※本欄は学部・研究科で追記等不要</p> <p>【教育の質保証・IRとの運動】 大学設置基準に基づく、厳格かつ客観的な成績評価の実施</p> <p>[参考]大学設置基準 (成績評価基準等の明示等) 第二十五条の二 (略)</p> <p>2 大学は、学修の成果に係る評価及び卒業の認定に当たっては、客観性及び厳格性を確保するため、学生に対してその基準をあらかじめ明示するとともに、当該基準にしたがって適切に行う。</p>	<p><全学共通項目> ※本欄は学部・研究科で追記等不要</p> <p>成績評価に著しい偏りがないか学部・研究科単位で確認し、偏りがある科目については是正の取り組みがされている。なお、成績評価の確認に当たっては、GP (Grade Point) を活用する。</p>	6月	令和6年度後期科目の状況の点検	<p>成績評価結果の確認：博士前期・後期課程における成績の分布の確認を行った。一部科目では、「秀」に偏った成績評価がされている。</p>	<p>国際総合科学群・医学群それぞれのIRで成績評価の実施状況を分析・確認 ※教学IRにて作成する実施報告書を参照するため本欄は記入不要</p>	<p>成績評価結果の今後の改善：今回偏りが見られた科目においては、客観性及び厳格性が確保された成績評価が行われるよう、今後も特に注視して点検を行っていく。</p>	
					10月	令和7年度前期科目の状況の点検				
A 教 育	1	<p>・大学・高専機能強化支援事業を用いて教員の増員を行うとともに、科目の充実を図る。 ・修士学位論文のオンライン提出を導入し、作業の効率化を図る。</p>	<p>【教育の質向上】 ・教員定員の充足を目指す。 ・DS専攻ではカリキュラムの見直しと整理を検討する。 ・HDS専攻では博士後期課程学生の修了に向けて指導を充実させる。 ・修士学位論文のオンライン提出における課題を整理する。</p>	<p>・DS関連の採用が全国で進んでいるため、カリキュラムに適した優秀な教員を採用できるか分からない。 ・HDS専攻では新任教員の着任に伴う新たな指導体制の構築が必要である。 ・修士学位論文保管用の形態および提出期日が決まっていない。</p>	①通年	①学生に寄り添った授業・研究指導に取り組む	<p>・2名の新規教員を採用した。 ・新任教員の大学院における指導資格審査を行い、指導体制の充実を図った。 ・修士学位論文のオンライン提出を導入し、作業の効率化を図った。</p>	<p>・新たに8名の教員が新たに加わり、次年度に向けて2名の教員を採用した。 ・両専攻ともに新規科目を設定した。 ・DS専攻では博士後期課程は1名、博士前期課程は21名の修了生を輩出した。HDS専攻では博士後期課程は3名、博士前期課程で12名を輩出した。 ・HDS専攻では、DS学部からの推薦入試の制度を整備した。来年度の入試から開始予定である。 ・HDS専攻修士と医学科専攻博士のデュアルディグリープログラムの整備を行っている。その前段階として今年度より医学科専攻の教員2名を連携教員として教育を行っている。 ・HDS専攻の学生がDS専攻の科目を履修し、専攻を跨いだ教育を行うことができた。</p>	<p>・教員が増えたため、カリキュラは充実したが、改めてその見直しと整理が必要が検討する。</p>	
					②通年	②カリキュラムの見直しと整理の検討をする				
B 研 究	1	<p>・引き続き、主・副研究指導教員が協力するとともに、専攻間の連携を強め、適切な研究指導プロセスの実行を図る。 ・修士学位論文の中間報告会および博士学位論文の予備審査発表会を行う。 ・教員の業務の効率化を進め、研究時間の確保に努める。</p>	<p>【研究力の向上】※研究科のみ記入 ・主・副研究指導教員が共に連携することで、学生にとって適切な研究指導プロセスの実行を図る。 ・引き続き、専攻間での連携を図りつつ、それがさらに促進されるような方法を専攻間、さらには他の研究科と共同で模索する。 ・修士学位論文の中間報告会および博士学位論文の予備審査発表会を行う。</p>	<p>・研究指導における副研究指導教員の関与が強化されている。 ・専攻間で副指導教員が可能になるように検討する。 ・博士前期/後期課程ともに休学を除く修了年次生全員が中間報告会あるいは予備審査発表会を行う。</p>	①通年	①主・副指導教員が連携することで、適切な研究指導プロセスの実行を図る	<p>・両専攻を跨いだ副研究指導教員の選定ができるようになった。 ・学内連携教員の2名(医学研究科)により、HDS専攻でも主指導教員としてご指導できるようになった。 ・SPRING事業にDS専攻から2名の応募者があった。 ・学術的研究推進事業「国際共同研究プロジェクト」を都市文化研究科の教員1名と共同で実施している。 ・修士学位論文の中間報告会および博士学位論文の予備審査発表会を行った。</p>	<p>・修士論文提出計画書の提出、および修士学位論文の中間報告会や博士学位論文の予備審査発表会を行うことで、研究の確実な進捗管理が図られた。 ・SPRING事業について1名を選定した。 ・DS専攻の学生が著者である論文が査読付き英文雑誌に2報(筆頭1報、筆1報)掲載された。また、国内イベントでの学生の受賞が2件あった。 ・HDS教員が1件の学会賞を受賞した。 ・HDS専攻の学生が著者である論文が査読付き英文雑誌に25報掲載され、うち14報が学生を筆頭著者とするものであった。また、国内学会での学生の受賞が1件あった。 ・HDS専攻とDS専攻間で、専攻を跨いで副指導教員として学生指導ができる体制を整備した。</p>	<p>・主・副研究指導教員が協力するとともに、専攻間の連携を強めることで、適切な研究指導体制とプロセスを確保する。 ・修士学位論文の中間報告会および博士学位論文の予備審査発表会を行う。 ・教員の業務の効率化を進め、研究時間の確保に努める。</p>	
					②通年	②専攻間・研究科間の連携方法を模索				
					③9~10月	③中間報告会および予備審査発表会を実施する				

※セルの行数、幅は変更自由です。

項目	枝番	Plan				Do		Check	Action
		1 取組	2 課題	3 到達目標	4 スケジュール		5 改善に向けた具体的取組	6 成果	7 次年度の取組に向けて
					時期	内容			
C 特色出し	1	<p>令和6年度シート転記「次年度での取組に向けて」</p> <ul style="list-style-type: none"> 引き続き一部科目を他研究科に開放し、研究科間の連携を図る。 他研究科と合同で、サマーデザインワークショップをはじめとした各種セミナーを実施する。 教員紹介HPの内容の充実を図る。 	<p>【特色を出す取組】</p> <ul style="list-style-type: none"> 一部科目を他研究科に開放することで、研究科間の連携を図る。 データサイエンスセミナー・ヘルスデータサイエンスセミナーを実施する。 他研究科と合同で、サマーデザインワークショップをはじめとした各種セミナーなどを実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> 異なる分野の教員が集まっており、また新任教員も多い。 	<ul style="list-style-type: none"> 一部科目を他研究科に開放する。 データサイエンスセミナー・ヘルスデータサイエンスセミナーを実施する。 HDS専攻では、新任教員の専門分野も含めたセミナー実施を行い、教育研究体制の充実をアピールする。 他研究科と合同で、サマーデザインワークショップなどを実施するなど、他研究科との連携を深める。 	<ul style="list-style-type: none"> ①通年 ①一部科目を他研究科に開放する ②前期 ②データサイエンスセミナー・ヘルスデータサイエンスセミナーを実施する ③9月 ③サマーデザインワークショップを実施する ④通年 ④他研究科と合同セミナーなどを実施する 	<ul style="list-style-type: none"> 環境経済学研究、調査方法論、Economic Analysis IIIを国際マネジメント研究科に開放した。 博士学位論文発表会を他研究科にも開放した。 データサイエンスセミナー・ヘルスデータサイエンスセミナーを実施した。 都市社会文化研究科・国際マネジメント研究科と共同でサマーデザインワークショップを実施した。 第2回YCU研究者交流会（大人の浜大祭）を実施した。 	<ul style="list-style-type: none"> 国際マネジメント研究科の学生がDS研究科の科目を受講し、研究科間の連携が図られた。 サマーデザインワークショップは32名で実施し、データサイエンス人材の育成に寄与した。 YCU研究者交流会をきっかけに他研究科からの研究協力などの話が進んだ。 	<ul style="list-style-type: none"> 引き続き一部科目を他研究科に開放し、研究科間の連携を図る。 他研究科と合同で、サマーデザインワークショップをはじめとした各種セミナーを実施する。 他研究科との研究協力を進める。
	2	<ul style="list-style-type: none"> 引き続き、様々な分野における産官学連携による教育・研究の推進を図る。 	<p>【特色を出す取組】</p> <ul style="list-style-type: none"> 様々な分野における産官学連携による教育・研究の推進を図る。 産官学連携によって得られた成果を積極的に発信する。 	<ul style="list-style-type: none"> 新任教員も加わったことから、URAと協力しながら、今後の産官学連携のあり方を模索する必要がある。 産官学連携が必ずしも外部資金獲得につながるとは限らない。 	<ul style="list-style-type: none"> 新規の連携プロジェクトを1件以上開始する。 産学連携における他研究科との協働を模索する。 産官学連携によって得られた成果を広報する。 	<ul style="list-style-type: none"> ①通年 ①URAとともに、自治体や企業との打ち合わせを開催し、プロジェクトを推進する ①通年 ②他研究科とのコミュニケーションを図り、協働で産学連携を進められるか模索する ①通年 ③成果を広報する 	<ul style="list-style-type: none"> 産学連携に関する基本協定を2件締結した。 国際マネジメント研究科とともに、民間企業との共同研究の契約を締結した。 	<ul style="list-style-type: none"> 企業との連携により共同研究などが進展するとともに、研究費の獲得につながった。 HDS専攻では、DeNAと産学連携協定を締結し、レセプトデータを用いたデータソンを実施し横浜市医師局職員が審査員として講評し、データサイエンスのカリキュラムを共同開発した。 	<ul style="list-style-type: none"> 引き続き、様々な分野における産官学連携による教育・研究の推進を図る。
D 共通課題	1	<ul style="list-style-type: none"> 修士学位論文の英語要旨を継続する。 引き続き、国際学会への学生参加を推奨する。 	<p>【グローバル教育】</p> <ul style="list-style-type: none"> 修士学位論文の英語要旨を継続する。 国際学会や英語で学べる教育機会などへの学生参加を促す。 海外研究への参画などを促す。 留学生を受け入れる。 	<ul style="list-style-type: none"> 英語による科目を提供していない。 国際的な活動の場の提供が乏しい。 	<ul style="list-style-type: none"> 国際学会や英語で学べる教育機会などへ学生が参加する。 学生が参画できる海外との研究を模索する。 留学生を受け入れる。 	<ul style="list-style-type: none"> ①通年 ①国際学会や英語で学べる教育機会などへの学生参加を促す。 ②通年 ②海外との研究に学生が参画できる環境を整える 	<ul style="list-style-type: none"> 修士学位論文の要旨を英語で提出させた。 国際学会への学生の参加と研究発表があった。 	<ul style="list-style-type: none"> 国際学会でDS専攻の学生が8回、HDS専攻の学生が4回の発表を行った。 	<ul style="list-style-type: none"> 修士学位論文の英語要旨を継続する。 引き続き、国際学会への学生参加を推奨する。

※セルの行数、幅は変更自由です。

項目	枝番	Plan				Do		Check	Action	
		1 取組	2 課題	3 到達目標	4 スケジュール		5 改善に向けた具体的取組	6 成果	7 次年度の取組に向けて	
					時期	内容				
D 共通課題	2	<p>令和6年度シート転記「次年度での取組に向けて」</p> <p>・引き続きDSリカレントプログラムを提供することで、リカレント教育に寄与するとともに、社会におけるデータ思考の促進に貢献する。</p>	<p>【リカレント教育】</p> <p>・DSリカレントプログラムを提供することで、リカレント教育に寄与するとともに、社会におけるデータ思考の促進に貢献する。<u>加えて、他大学（明治大学・東京理科大学）との連携を継続する。</u></p>	<p>・受講生のニーズとの不一致（大学院科目よりも入門的なレベルの方がニーズが高い）。</p>	<p>・目標計画値：満足度80%以上</p>	<p>①通年</p>	<p>①DSリカレントプログラムを実施する</p>	<p>・大学院科目を組み合わせることで、履修証明プログラムであるDSリカレントプログラムにおいて二つのコースを提供した。</p> <p>・次年度のDSリカレント募集に向けて必要な情報整理や運用準備を進めており、次年度の円滑な受入体制の構築に取り組んでいる。</p>	<p>・大学院科目からなるDSリカレントの科目を追加したプログラムのコースについて募集を開始した。</p>	<p>・引き続きDSリカレントプログラムを提供するとともに、改善できることを検討することで、リカレント教育に寄与する。</p>
	3	<p>・さらに学生室（含プロジェクト研究室等）の確保と改修を行う。</p> <p>・学生室のより適切な割当方法および学生間の交流を促進するオープンスペースの活用方法について検討を行う。</p>	<p>【大学院生の孤立化防止】</p> <p>・支援2を用いて、大学院生の居室の整備を行っている、ゼミ室やオープンスペースの学生室の運用方法を検討する。<u>また、学生が主体の会を設けて、学生交流が進むようにする。</u></p>	<p>・特に、DS専攻においては（原則）オンライン授業を実施しているため、来学しない学生も多い。</p>	<p>・居室の整備による大学院生の居場所を確保し、学生間の交流を促進することで孤立化を緩和する。</p>	<p>①通年</p> <p>②通年</p>	<p>①居室の整備と運用方法を検討する学生が主体の会を設けることで学生交流を促進する</p>	<p>・大学・高専機能強化支援事業を用いて教員居室および学生室の仕様の整備などを行った。</p> <p>・ゼミ室やオープンスペースの学生室の運用方法を検討した。</p> <p>・学生が主体の会を設けた。</p>	<p>・学生どうしが交流できるオープンスペースの運用を検討し、その利用を促進させた。</p> <p>・学生が主体の会を設けることで、学生間の交流する会を実施した。また、学内向けの大学院説明会において、大学院生から学生生活の紹介をした。</p>	<p>・学生の交流が進むような方策をさらに検討する。</p>
	4		<p>【大学院の定員超過及び未充足の改善】※<u>研究科のみが対象</u></p> <p>※別紙：令和6年度の取容定員率と入学定員充足率を認証評価共通基礎データ様式にて確認（データは事務局にて作成）するため本欄は記入不要</p>	<p>・優秀な学部4年生に対する博士前期課程進学への浸透に課題がある。</p> <p>・特に、DS専攻では優秀な修士学生に対する博士後期課程進学への浸透に課題がある。</p> <p>・HDS専攻博士後期課程の取容定員充足率がオーバーしている（ただし、今年度初めて修了生を輩出するため、今後の推移を見守る必要がある）。</p>	<p>・特に、両専攻の博士前期課程において、入学定員並びに取容定員を満たす（HDS専攻博士前期課程の取容定員を除く）。これは、特に定員増したことに起因していると思われるため、入学者数をしっかりと確保する必要がある。そのため、まずはDS学部からの内 部進学が進むように、大学院進学の意識を浸透させる。</p> <p>・セミナーなどを通じて広報に努める。</p> <p>・また、入試選考方法の検討を行う。</p>	<p>①通年</p>	<p>①大学院説明会を実施する</p>	<p>・DS専攻は1回、HDS専攻は2回の入試説明会をそれぞれ実施した。</p> <p>・DS学部生向けの大学院説明会を実施した。</p> <p>・データサイエンスセミナー・ヘルスデータサイエンスセミナーを実施した。</p>	<p>別紙：令和7年度の定員管理と大学院進学率を認証評価共通基礎データ様式にて確認（データは事務局にて作成）するため本欄は記入不要</p>	<p>・大学院説明会を実施することで、志願者数の確保を図る。</p> <p>・データサイエンスセミナー並びにヘルスデータサイエンスセミナーを実施する。</p> <p>・教員が増員されることによって、DS学部からより多くの優秀な学生を両専攻へ進学させる。</p>
	<p>②通年</p> <p>③4月</p> <p>④8～9月</p> <p>⑤2月</p>					<p>②データサイエンスセミナー・ヘルスデータサイエンスセミナーを実施する。</p> <p>③オリエンテーションにおける博士課程進学の周知</p> <p>④第1期入試を実施する</p> <p>⑤第2期入試を実施する</p>				

※セルの行数、幅は変更自由です。

項目	校番	Plan			Do		Check	Action		
		令和6年度シート転記「次年度での取組に向けて」	1 取組	2 課題	3 到達目標	4 スケジュール		5 改善に向けた具体的取組	6 成果	7 次年度の取組に向けて
						時期	内容			
A 教育	1	/	<p><全学共通項目> ※本欄は学部・研究科で追記等不要 【教育の質保証・IRとの連動】 大学設置基準に基づく、厳格かつ客観的な成績評価の実施 【参考】大学設置基準 (成績評価基準等の明示等) 第二十五条の二 (略) 2 大学は、学修の成果に係る評価及び卒業の認定に当たっては、客観性及び厳格性を確保するため、学生に対してその基準をあらかじめ明示するとともに、当該基準にしたがって適切に行う。</p>	/	<p><全学共通項目> ※本欄は学部・研究科で追記等不要 成績評価に著しい偏りがないか学部・研究科単位で確認し、偏りがある科目については是正の取り組みがされている。なお、成績評価の確認に当たっては、GP (Grade Point) を活用する。</p>	6月	令和6年度後期科目の状況の点検	<p>修士博士共に成績分布における「秀」が7割近い状況にあり、GP平均値においても直近3か年で共に0.3ポイント程度上昇している点がIR部門より報告された。</p>	<p>国際総合科学群・医学群それぞれのIRで成績評価の実施状況を分析・確認 ※教学IRにて作成する実施報告書を参照するため本欄は記入不要</p>	<p>ディプロマポリシーとカリキュラムマップを踏まえ、各科目の「学修到達目標」に見合った成績評価方法、評価基準・難易度になっているかの検討を行い、GP (Grade Point) の運用改善を進める。</p>
						10月	令和7年度前期科目の状況の点検			
A 教育	2	<p>・引き続き医理連携、医経連携、データサイエンス研究科との連携等、研究科の垣根を越えた横断的連携を図る。今後も複数研究科の学生を受講対象とする科目の開講、他研究科の教員を招いての講義等の機会を設け、研究科間の交流の機会としていく。 ・医学部研究室を卒業研究先として選択する学生（理系学部生）を対象として、各キャンパスの教務担当者と連携して引き続き医学研究科科目の早期履修制度を運用していく。 ・データサイエンス研究科との教育・研究連携について積極的に検討する。</p>	<p>【教育の質向上】 生命医科学研究科やデータサイエンス研究科、国際マネジメント研究科等との連携、外部機関等との連携強化</p>	<p>・国際総合科学群の各学部・研究科とのさらなる連携強化が必要。 ・データサイエンス研究科（ヘルスデータサイエンス専攻）との連携強化については新たなしくみの検討が必要。</p>	①7月	第1回 医理連携セミナー（医学研究科教員が講演を担当）	<p>①医理連携協議会（6月、10月、3月）での議論を踏まえ講師を選定し、生命医科学研究科と「医理連携セミナー」を共同開催した。 ②「バイオインフォマティクス特講」（履修者：医学研究科7名、生命ナノシステム科学研究科3名、生命医科学研究科1名）を開講した。 「バイオインフォマティクス実践」（履修者：医学研究科20名、生命ナノシステム科学研究科6名）を開講した。 ④データサイエンス研究科ヘルスデータサイエンス専攻との連携強化について検討し、一部科目の共通化とデュアルディグリープログラムの導入を決定した。</p>	<p>【研究科間連携の推進】 R8年度も科目やセミナーの共同開催、早期履修制度等を通じての医理連携、医経連携、データサイエンス研究科との連携等、研究科の垣根を越えた横断的連携を図る。 データサイエンス研究科ヘルスデータサイエンス専攻との間でのデュアルディグリープログラムについて、R9年度の開設に向けR8年度から募集を開始する。</p>		
					①11月	第2回 医理連携セミナー（生命医科学研究科教員が講演を担当）				
					①通年	・医学研究科教員による生命医科学研究科「医科学特論」講義 ・医理連携協議会の開催（年5回程度）				
					②通年	・国際群の研究科との共通科目「バイオインフォマティクス実践」、「バイオインフォマティクス特講」を開講 ・国際マネジメント研究科のソーシャル・イノベーション講義を医科学専攻の選択科目「医療と経営」（2単位）として履修可能とし、実施				
					③通年	・理学部からの卒業研究生を対象とした医学研究科（博士課程）科目の早期履修制度の運用 ・データサイエンス研究科ヘルスデータサイエンス専攻（博士前期課程）の学生を対象とした医学研究科（博士課程）科目の早期履修制度の運用				
④通年	データサイエンス研究科（ヘルスデータサイエンス専攻）とのダブルディグリー制度について、医学群内の各会議で検討開始									

※セルの行数、幅は変更自由です。

項目	校番	Plan			4 スケジュール		Do	Check	Action
		1 取組	2 課題	3 到達目標	時期	内容	5 改善に向けた具体的取組	6 成果	7 次年度の取組に向けて
A 教育	3	<p>①がん総合医科学教室や看護学専攻の教員、事務担当と連携の上、引き続き開講準備や受講者への対応を行う。</p> <p>②医学専攻博士課程の「がんブロコース」、医学研究科の修士・博士課程の大学院生を対象とした「インテンシブプログラム」については、年度当初における学内周知を積極的に行い、受講者増につなげる。学外受講者の募集についてはより幅広い方に興味を持ってもらえるよう、ホームページ等のより効果的な活用により周知する。</p> <p>③R7年度も引き続き、プログラム事務局（医学国際化等担当）や国際マネジメント研究科との連携を密に実施する。</p> <p>④職業訓練給付金制度を統括している看護学専攻担当と連携し、対象者がいる場合には積極的な活用を促す。</p>	<p>【リカレント教育】</p> <p>①R6年度に再開した「がんプロ」リカレントプログラム（インテンシブプログラム、がんパネル検査習熟医養成プログラム）の運営</p> <p>②「YCU医療経営・政策プログラム」との連携</p> <p>【大学院生対象の制度・プログラム】</p> <p>③医学専攻博士課程を対象とする「がんブロコース」、修士/博士課程を対象とする「インテンシブプログラム」の継続運営</p> <p>④医学専攻修士課程 職業訓練給付金制度の継続実施</p>	<p>・多職種に渡る医療従事者のコースに合った教育プログラムの検討が必要。</p> <p>・各プログラム受講者増に向けた周知方法について検討が必要。</p>	<p>①下記2種類のリカレントプログラムを継続運営し、受講者増を目指す。</p> <p>・医学/看護学インテンシブプログラム(6単位)：R7年度受講者1名</p> <p>・がんパネル検査習熟医養成プログラム(1単位)：R7年度受講者1名</p>	<p>①通年</p> <p>・「がんプロ」リカレントプログラム（インテンシブプログラム、がんパネル検査習熟医養成プログラム）の運営</p> <p>・R8年度以降の新たな体制について検討、準備</p>	<p>①R7年度のプログラムの学外受講者は2名でいずれも修了見込み（「医科学インテンシブプログラム」1名、「がんパネル検査習熟医養成プログラム」1名）。R8年度についても受講者の募集を行い、2名の出願があった（「医科学インテンシブプログラム」2名）。R8年度についても受講者の募集を行い、2名の出願があった（「医科学インテンシブプログラム」2名）。R8年度についても受講者の募集を行い、2名の出願があった（「医科学インテンシブプログラム」2名）。R8年度についても受講者の募集を行い、2名の出願があった（「医科学インテンシブプログラム」2名）。</p>	<p>【多様な教育機会の提供】</p> <p>R8年度も「がんプロ」関連プログラムの開講を通じてリカレント教育に力を入れる。</p> <p>医学研究科の大学院生を対象とする「がんブロコース」や「がんプロ インテンシブプログラム」、「YCU医療経営・政策プログラム」を通じて、大学院生へ多様な学びの機会を提供する。</p>	
		<p>②R7年度も引き続き、プログラム事務局（医学国際化等担当）や国際マネジメント研究科との連携を密に実施する。</p> <p>③職業訓練給付金制度を統括している看護学専攻担当と連携し、対象者がいる場合には積極的な活用を促す。</p>	<p>【大学院生対象の制度・プログラム】</p> <p>③医学専攻博士課程を対象とする「がんブロコース」、修士/博士課程を対象とする「インテンシブプログラム」の継続運営</p> <p>④医学専攻修士課程 職業訓練給付金制度の継続実施</p>	<p>・大学へのしきりによる研究倫理教育の継続が必要。</p> <p>・研究医を養成するための新たなしくみ（新コースの設置、医学部医学科生を対象とする早期履修制度の運用等）に関する検討が必要。</p>	<p>①e-APRINの受講やFD研修会等での啓発を継続し、教室・研究グループ間での十分な意思疎通や課題共有を行い、研究活動に伴うデータを適切に保管・管理する。また、投稿論文の事前チェックシート提出を促進する。</p> <p>②「生命倫理セミナー」の開講を通じて、公正な研究活動に対する意識の向上を図る。</p> <p>③「リサーチ・クラークシップ」等、医学部のカリキュラムと連携しながら、研究活性化を図る新たなしくみを検討する。</p>	<p>①4月</p> <p>博士課程、修士課程新入生へのオリエンテーションにおける、研究倫理・不正防止に係る説明の実施</p>	<p>・4月に開催した修士・博士課程の新入生向けオリエンテーションにおいて、人を対象とする医学系研究倫理委員会委員長から研究倫理・不正防止に係る説明を実施した。</p> <p>・学生に対し、eAPRINの受講修了を「生命倫理セミナー」（必修科目）単位修得のための必須条件としている。</p>	<p>例年開催しているオリエンテーション（博士課程・修士課程への入学への説明会）での説明や、必修科目「生命倫理セミナー」（R7年度履修者：113名）の単位修得のための必須条件としてeAPRIN受講を義務化することにより、研究者としての倫理マインド醸成を図っている。</p>	<p>【倫理教育と研究力の向上】</p> <p>学生の公正な研究活動と倫理教育に関するカリキュラムへの反映等について継続的な検討・実施を行うと共に、附属2病院における博士学位未取得の教員に対し、医学研究科への入学と学位取得を引き続き促していく。</p>
		<p>③R7年度も引き続き、プログラム事務局（医学国際化等担当）や国際マネジメント研究科との連携を密に実施する。</p> <p>④職業訓練給付金制度を統括している看護学専攻担当と連携し、対象者がいる場合には積極的な活用を促す。</p>	<p>【大学院生対象の制度・プログラム】</p> <p>③医学専攻博士課程を対象とする「がんブロコース」、修士/博士課程を対象とする「インテンシブプログラム」の継続運営</p> <p>④医学専攻修士課程 職業訓練給付金制度の継続実施</p>	<p>・大学へのしきりによる研究倫理教育の継続が必要。</p> <p>・研究医を養成するための新たなしくみ（新コースの設置、医学部医学科生を対象とする早期履修制度の運用等）に関する検討が必要。</p>	<p>①e-APRINの受講やFD研修会等での啓発を継続し、教室・研究グループ間での十分な意思疎通や課題共有を行い、研究活動に伴うデータを適切に保管・管理する。また、投稿論文の事前チェックシート提出を促進する。</p> <p>②「生命倫理セミナー」の開講を通じて、公正な研究活動に対する意識の向上を図る。</p> <p>③「リサーチ・クラークシップ」等、医学部のカリキュラムと連携しながら、研究活性化を図る新たなしくみを検討する。</p>	<p>①前期</p> <p>・e-APRIN(e-learnig)の受講</p> <p>・投稿論文の事前チェックシート提出の喚起</p>	<p>・学生に対し、eAPRINの受講修了を「生命倫理セミナー」（必修科目）単位修得のための必須条件としている。</p>	<p>例年開催しているオリエンテーション（博士課程・修士課程への入学への説明会）での説明や、必修科目「生命倫理セミナー」（R7年度履修者：113名）の単位修得のための必須条件としてeAPRIN受講を義務化することにより、研究者としての倫理マインド醸成を図っている。</p>	<p>【倫理教育と研究力の向上】</p> <p>学生の公正な研究活動と倫理教育に関するカリキュラムへの反映等について継続的な検討・実施を行うと共に、附属2病院における博士学位未取得の教員に対し、医学研究科への入学と学位取得を引き続き促していく。</p>
		<p>③R7年度も引き続き、プログラム事務局（医学国際化等担当）や国際マネジメント研究科との連携を密に実施する。</p> <p>④職業訓練給付金制度を統括している看護学専攻担当と連携し、対象者がいる場合には積極的な活用を促す。</p>	<p>【大学院生対象の制度・プログラム】</p> <p>③医学専攻博士課程を対象とする「がんブロコース」、修士/博士課程を対象とする「インテンシブプログラム」の継続運営</p> <p>④医学専攻修士課程 職業訓練給付金制度の継続実施</p>	<p>・大学へのしきりによる研究倫理教育の継続が必要。</p> <p>・研究医を養成するための新たなしくみ（新コースの設置、医学部医学科生を対象とする早期履修制度の運用等）に関する検討が必要。</p>	<p>①e-APRINの受講やFD研修会等での啓発を継続し、教室・研究グループ間での十分な意思疎通や課題共有を行い、研究活動に伴うデータを適切に保管・管理する。また、投稿論文の事前チェックシート提出を促進する。</p> <p>②「生命倫理セミナー」の開講を通じて、公正な研究活動に対する意識の向上を図る。</p> <p>③「リサーチ・クラークシップ」等、医学部のカリキュラムと連携しながら、研究活性化を図る新たなしくみを検討する。</p>	<p>②近年</p> <p>「生命倫理セミナー」での倫理・研究不正にかかる講義の実施</p>	<p>・学生に対し、eAPRINの受講修了を「生命倫理セミナー」（必修科目）単位修得のための必須条件としている。</p>	<p>例年開催しているオリエンテーション（博士課程・修士課程への入学への説明会）での説明や、必修科目「生命倫理セミナー」（R7年度履修者：113名）の単位修得のための必須条件としてeAPRIN受講を義務化することにより、研究者としての倫理マインド醸成を図っている。</p>	<p>【倫理教育と研究力の向上】</p> <p>学生の公正な研究活動と倫理教育に関するカリキュラムへの反映等について継続的な検討・実施を行うと共に、附属2病院における博士学位未取得の教員に対し、医学研究科への入学と学位取得を引き続き促していく。</p>

B 研究	1	<p>・学生の公正な研究活動と倫理教育に関するカリキュラムへの反映等について継続的な検討・実施を行う。</p>	<p>【研究力の向上】※研究科のみ記入 公正な研究活動と研究倫理教育の持続的な取組</p>	<p>・大学へのしきりによる研究倫理教育の継続が必要。</p> <p>・研究医を養成するための新たなしくみ（新コースの設置、医学部医学科生を対象とする早期履修制度の運用等）に関する検討が必要。</p>	<p>①e-APRINの受講やFD研修会等での啓発を継続し、教室・研究グループ間での十分な意思疎通や課題共有を行い、研究活動に伴うデータを適切に保管・管理する。また、投稿論文の事前チェックシート提出を促進する。</p> <p>②「生命倫理セミナー」の開講を通じて、公正な研究活動に対する意識の向上を図る。</p> <p>③「リサーチ・クラークシップ」等、医学部のカリキュラムと連携しながら、研究活性化を図る新たなしくみを検討する。</p>	<p>①4月</p> <p>博士課程、修士課程新入生へのオリエンテーションにおける、研究倫理・不正防止に係る説明の実施</p>	<p>・4月に開催した修士・博士課程の新入生向けオリエンテーションにおいて、人を対象とする医学系研究倫理委員会委員長から研究倫理・不正防止に係る説明を実施した。</p> <p>・学生に対し、eAPRINの受講修了を「生命倫理セミナー」（必修科目）単位修得のための必須条件としている。</p>	<p>例年開催しているオリエンテーション（博士課程・修士課程への入学への説明会）での説明や、必修科目「生命倫理セミナー」（R7年度履修者：113名）の単位修得のための必須条件としてeAPRIN受講を義務化することにより、研究者としての倫理マインド醸成を図っている。</p>	<p>【倫理教育と研究力の向上】</p> <p>学生の公正な研究活動と倫理教育に関するカリキュラムへの反映等について継続的な検討・実施を行うと共に、附属2病院における博士学位未取得の教員に対し、医学研究科への入学と学位取得を引き続き促していく。</p>
		<p>・医学専攻必修科目である「大学院医学セミナー」「生命倫理セミナー」においては、出席した学生に各回講義の感想文の提出を求め、取りまとめ後に担当講師へ報告を行っている（講義担当者が学外ゲスト講師の場合は、件介役を担当した学内教員にも送付）。</p> <p>・「バイオインフォマティクス実践・特講」について、先端医学研究センター担当教員、研究・産学連携推進課と連携して引き続き開講し、他研究科などにも広く周知（一部単位化）する。</p>	<p>【特色を出す取組】</p> <p>教育研究指導体制、カリキュラムや入試の継続的な改善</p>	<p>・教育研究指導体制、履修カリキュラムや入試方法は、DP（ディプロマポリシー）、CP（カリキュラムポリシー）に従って、必要に応じて改善。</p> <p>・よりよい学修環境・研究環境の整備に向け、大学院生からの意見や相談を受け付ける窓口の新設が必要。</p>	<p>教育評価アンケートやその他の学内アンケートの実施を通じて、教育研究指導体制、カリキュラムや入試に関して行った変更後の評価を行い、教育研究指導体制について継続的に課題を整理し改善する。</p> <p>R6年度のアンケートで要望のあった「大学院生向け相談窓口の設置」について、具体的に検討のうえ運用を開始する（開始時期：R7年度前期中）。</p>	<p>前期</p> <p>医学研究科医科学専攻の大学院生を対象とする相談窓口の開設</p>	<p>・大学院生を対象とした教育評価アンケートについては、後期科目の評価反映のため、12月にアンケートを配布し、1月を期限として実施している。</p> <p>・6月に設置した大学院生専用の相談窓口には2件の相談が寄せられた。寄せられた内容をもとに医学研究科医科学専攻会議で検討を重ね、11-12月に医学部と附属2病院に所属する全ての教員を対象とした研究指導にかかるアンケートを実施した。</p> <p>・DP（ディプロマポリシー）、CP（カリキュラムポリシー）について確認・検討を行い、医学研究科医科学専攻のカリキュラムマップの作成を行った。</p> <p>R8年度の開講科目について、授業内容の適正化と教員負担減の観点から、各科目あたりの授業時間数の見直しを行った。</p>	<p>・大学院生を対象とした教育評価アンケートについては、後期科目の評価反映のため、12月にアンケートを配布し、1月を期限として実施している。</p> <p>・6月に設置した大学院生専用の相談窓口には2件の相談が寄せられた。寄せられた内容をもとに医学研究科医科学専攻会議で検討を重ね、11-12月に医学部と附属2病院に所属する全ての教員を対象とした研究指導にかかるアンケートを実施した。</p> <p>・DP（ディプロマポリシー）、CP（カリキュラムポリシー）について確認・検討を行い、医学研究科医科学専攻のカリキュラムマップの作成を行った。</p> <p>R8年度の開講科目について、授業内容の適正化と教員負担減の観点から、各科目あたりの授業時間数の見直しを行った。</p> <p>・医学研究科において、先端医学研究センターや研究・産学連携推進センター所属の一部教員が学生の研究指導に携われるよう、博士課程の指導資格審査を実施し、資格付与を承認した。</p>	<p>【大学院生の声を教育研究指導に生かす取り組み】</p> <p>教育評価アンケートや大学院生向け相談窓口の運用を継続し、大学院生の声を教育研究指導体制の改善に活かしていく。</p>
		<p>・医学専攻必修科目である「大学院医学セミナー」「生命倫理セミナー」においては、出席した学生に各回講義の感想文の提出を求め、取りまとめ後に担当講師へ報告を行っている（講義担当者が学外ゲスト講師の場合は、件介役を担当した学内教員にも送付）。</p> <p>・「バイオインフォマティクス実践・特講」について、先端医学研究センター担当教員、研究・産学連携推進課と連携して引き続き開講し、他研究科などにも広く周知（一部単位化）する。</p>	<p>【特色を出す取組】</p> <p>教育研究指導体制、カリキュラムや入試の継続的な改善</p>	<p>・教育研究指導体制、履修カリキュラムや入試方法は、DP（ディプロマポリシー）、CP（カリキュラムポリシー）に従って、必要に応じて改善。</p> <p>・よりよい学修環境・研究環境の整備に向け、大学院生からの意見や相談を受け付ける窓口の新設が必要。</p>	<p>教育評価アンケートやその他の学内アンケートの実施を通じて、教育研究指導体制、カリキュラムや入試に関して行った変更後の評価を行い、教育研究指導体制について継続的に課題を整理し改善する。</p> <p>R6年度のアンケートで要望のあった「大学院生向け相談窓口の設置」について、具体的に検討のうえ運用を開始する（開始時期：R7年度前期中）。</p>	<p>12月</p> <p>教育評価アンケート実施、評価、評価結果への対応</p>	<p>・大学院生を対象とした教育評価アンケートについては、後期科目の評価反映のため、12月にアンケートを配布し、1月を期限として実施している。</p> <p>・6月に設置した大学院生専用の相談窓口には2件の相談が寄せられた。寄せられた内容をもとに医学研究科医科学専攻会議で検討を重ね、11-12月に医学部と附属2病院に所属する全ての教員を対象とした研究指導にかかるアンケートを実施した。</p> <p>・DP（ディプロマポリシー）、CP（カリキュラムポリシー）について確認・検討を行い、医学研究科医科学専攻のカリキュラムマップの作成を行った。</p> <p>R8年度の開講科目について、授業内容の適正化と教員負担減の観点から、各科目あたりの授業時間数の見直しを行った。</p>	<p>・大学院生を対象とした教育評価アンケートについては、後期科目の評価反映のため、12月にアンケートを配布し、1月を期限として実施している。</p> <p>・6月に設置した大学院生専用の相談窓口には2件の相談が寄せられた。寄せられた内容をもとに医学研究科医科学専攻会議で検討を重ね、11-12月に医学部と附属2病院に所属する全ての教員を対象とした研究指導にかかるアンケートを実施した。</p> <p>・DP（ディプロマポリシー）、CP（カリキュラムポリシー）について確認・検討を行い、医学研究科医科学専攻のカリキュラムマップの作成を行った。</p> <p>R8年度の開講科目について、授業内容の適正化と教員負担減の観点から、各科目あたりの授業時間数の見直しを行った。</p> <p>・医学研究科において、先端医学研究センターや研究・産学連携推進センター所属の一部教員が学生の研究指導に携われるよう、博士課程の指導資格審査を実施し、資格付与を承認した。</p>	<p>【大学院生の声を教育研究指導に生かす取り組み】</p> <p>教育評価アンケートや大学院生向け相談窓口の運用を継続し、大学院生の声を教育研究指導体制の改善に活かしていく。</p>

C 特色出し	1	<p>・医学専攻必修科目である「大学院医学セミナー」「生命倫理セミナー」においては、出席した学生に各回講義の感想文の提出を求め、取りまとめ後に担当講師へ報告を行っている（講義担当者が学外ゲスト講師の場合は、件介役を担当した学内教員にも送付）。</p> <p>・「バイオインフォマティクス実践・特講」について、先端医学研究センター担当教員、研究・産学連携推進課と連携して引き続き開講し、他研究科などにも広く周知（一部単位化）する。</p>	<p>【特色を出す取組】</p> <p>教育研究指導体制、カリキュラムや入試の継続的な改善</p>	<p>・教育研究指導体制、履修カリキュラムや入試方法は、DP（ディプロマポリシー）、CP（カリキュラムポリシー）に従って、必要に応じて改善。</p> <p>・よりよい学修環境・研究環境の整備に向け、大学院生からの意見や相談を受け付ける窓口の新設が必要。</p>	<p>教育評価アンケートやその他の学内アンケートの実施を通じて、教育研究指導体制、カリキュラムや入試に関して行った変更後の評価を行い、教育研究指導体制について継続的に課題を整理し改善する。</p> <p>R6年度のアンケートで要望のあった「大学院生向け相談窓口の設置」について、具体的に検討のうえ運用を開始する（開始時期：R7年度前期中）。</p>	<p>前期</p> <p>医学研究科医科学専攻の大学院生を対象とする相談窓口の開設</p>	<p>・大学院生を対象とした教育評価アンケートについては、後期科目の評価反映のため、12月にアンケートを配布し、1月を期限として実施している。</p> <p>・6月に設置した大学院生専用の相談窓口には2件の相談が寄せられた。寄せられた内容をもとに医学研究科医科学専攻会議で検討を重ね、11-12月に医学部と附属2病院に所属する全ての教員を対象とした研究指導にかかるアンケートを実施した。</p> <p>・DP（ディプロマポリシー）、CP（カリキュラムポリシー）について確認・検討を行い、医学研究科医科学専攻のカリキュラムマップの作成を行った。</p> <p>R8年度の開講科目について、授業内容の適正化と教員負担減の観点から、各科目あたりの授業時間数の見直しを行った。</p>	<p>・大学院生を対象とした教育評価アンケートについては、後期科目の評価反映のため、12月にアンケートを配布し、1月を期限として実施している。</p> <p>・6月に設置した大学院生専用の相談窓口には2件の相談が寄せられた。寄せられた内容をもとに医学研究科医科学専攻会議で検討を重ね、11-12月に医学部と附属2病院に所属する全ての教員を対象とした研究指導にかかるアンケートを実施した。</p> <p>・DP（ディプロマポリシー）、CP（カリキュラムポリシー）について確認・検討を行い、医学研究科医科学専攻のカリキュラムマップの作成を行った。</p> <p>R8年度の開講科目について、授業内容の適正化と教員負担減の観点から、各科目あたりの授業時間数の見直しを行った。</p> <p>・医学研究科において、先端医学研究センターや研究・産学連携推進センター所属の一部教員が学生の研究指導に携われるよう、博士課程の指導資格審査を実施し、資格付与を承認した。</p>	<p>【大学院生の声を教育研究指導に生かす取り組み】</p> <p>教育評価アンケートや大学院生向け相談窓口の運用を継続し、大学院生の声を教育研究指導体制の改善に活かしていく。</p>
		<p>・医学専攻必修科目である「大学院医学セミナー」「生命倫理セミナー」においては、出席した学生に各回講義の感想文の提出を求め、取りまとめ後に担当講師へ報告を行っている（講義担当者が学外ゲスト講師の場合は、件介役を担当した学内教員にも送付）。</p> <p>・「バイオインフォマティクス実践・特講」について、先端医学研究センター担当教員、研究・産学連携推進課と連携して引き続き開講し、他研究科などにも広く周知（一部単位化）する。</p>	<p>【特色を出す取組】</p> <p>教育研究指導体制、カリキュラムや入試の継続的な改善</p>	<p>・教育研究指導体制、履修カリキュラムや入試方法は、DP（ディプロマポリシー）、CP（カリキュラムポリシー）に従って、必要に応じて改善。</p> <p>・よりよい学修環境・研究環境の整備に向け、大学院生からの意見や相談を受け付ける窓口の新設が必要。</p>	<p>教育評価アンケートやその他の学内アンケートの実施を通じて、教育研究指導体制、カリキュラムや入試に関して行った変更後の評価を行い、教育研究指導体制について継続的に課題を整理し改善する。</p> <p>R6年度のアンケートで要望のあった「大学院生向け相談窓口の設置」について、具体的に検討のうえ運用を開始する（開始時期：R7年度前期中）。</p>	<p>12月</p> <p>教育評価アンケート実施、評価、評価結果への対応</p>	<p>・大学院生を対象とした教育評価アンケートについては、後期科目の評価反映のため、12月にアンケートを配布し、1月を期限として実施している。</p> <p>・6月に設置した大学院生専用の相談窓口には2件の相談が寄せられた。寄せられた内容をもとに医学研究科医科学専攻会議で検討を重ね、11-12月に医学部と附属2病院に所属する全ての教員を対象とした研究指導にかかるアンケートを実施した。</p> <p>・DP（ディプロマポリシー）、CP（カリキュラムポリシー）について確認・検討を行い、医学研究科医科学専攻のカリキュラムマップの作成を行った。</p> <p>R8年度の開講科目について、授業内容の適正化と教員負担減の観点から、各科目あたりの授業時間数の見直しを行った。</p>	<p>・大学院生を対象とした教育評価アンケートについては、後期科目の評価反映のため、12月にアンケートを配布し、1月を期限として実施している。</p> <p>・6月に設置した大学院生専用の相談窓口には2件の相談が寄せられた。寄せられた内容をもとに医学研究科医科学専攻会議で検討を重ね、11-12月に医学部と附属2病院に所属する全ての教員を対象とした研究指導にかかるアンケートを実施した。</p> <p>・DP（ディプロマポリシー）、CP（カリキュラムポリシー）について確認・検討を行い、医学研究科医科学専攻のカリキュラムマップの作成を行った。</p> <p>R8年度の開講科目について、授業内容の適正化と教員負担減の観点から、各科目あたりの授業時間数の見直しを行った。</p> <p>・医学研究科において、先端医学研究センターや研究・産学連携推進センター所属の一部教員が学生の研究指導に携われるよう、博士課程の指導資格審査を実施し、資格付与を承認した。</p>	<p>【大学院生の声を教育研究指導に生かす取り組み】</p> <p>教育評価アンケートや大学院生向け相談窓口の運用を継続し、大学院生の声を教育研究指導体制の改善に活かしていく。</p>
		<p>・医学専攻必修科目である「大学院医学セミナー」「生命倫理セミナー」においては、出席した学生に各回講義の感想文の提出を求め、取りまとめ後に担当講師へ報告を行っている（講義担当者が学外ゲスト講師の場合は、件介役を担当した学内教員にも送付）。</p> <p>・「バイオインフォマティクス実践・特講」について、先端医学研究センター担当教員、研究・産学連携推進課と連携して引き続き開講し、他研究科などにも広く周知（一部単位化）する。</p>	<p>【特色を出す取組】</p> <p>教育研究指導体制、カリキュラムや入試の継続的な改善</p>	<p>・教育研究指導体制、履修カリキュラムや入試方法は、DP（ディプロマポリシー）、CP（カリキュラムポリシー）に従って、必要に応じて改善。</p> <p>・よりよい学修環境・研究環境の整備に向け、大学院生からの意見や相談を受け付ける窓口の新設が必要。</p>	<p>教育評価アンケートやその他の学内アンケートの実施を通じて、教育研究指導体制、カリキュラムや入試に関して行った変更後の評価を行い、教育研究指導体制について継続的に課題を整理し改善する。</p> <p>R6年度のアンケートで要望のあった「大学院生向け相談窓口の設置」について、具体的に検討のうえ運用を開始する（開始時期：R7年度前期中）。</p>	<p>通年</p> <p>教育研究指導体制、カリキュラムや入試制度に関する見直し検討</p>	<p>・大学院生を対象とした教育評価アンケートについては、後期科目の評価反映のため、12月にアンケートを配布し、1月を期限として実施している。</p> <p>・6月に設置した大学院生専用の相談窓口には2件の相談が寄せられた。寄せられた内容をもとに医学研究科医科学専攻会議で検討を重ね、11-12月に医学部と附属2病院に所属する全ての教員を対象とした研究指導にかかるアンケートを実施した。</p> <p>・DP（ディプロマポリシー）、CP（カリキュラムポリシー）について確認・検討を行い、医学研究科医科学専攻のカリキュラムマップの作成を行った。</p> <p>R8年度の開講科目について、授業内容の適正化と教員負担減の観点から、各科目あたりの授業時間数の見直しを行った。</p>	<p>・大学院生を対象とした教育評価アンケートについては、後期科目の評価反映のため、12月にアンケートを配布し、1月を期限として実施している。</p> <p>・6月に設置した大学院生専用の相談窓口には2件の相談が寄せられた。寄せられた内容をもとに医学研究科医科学専攻会議で検討を重ね、11-12月に医学部と附属2病院に所属する全ての教員を対象とした研究指導にかかるアンケートを実施した。</p> <p>・DP（ディプロマポリシー）、CP（カリキュラムポリシー）について確認・検討を行い、医学研究科医科学専攻のカリキュラムマップの作成を行った。</p> <p>R8年度の開講科目について、授業内容の適正化と教員負担減の観点から、各科目あたりの授業時間数の見直しを行った。</p> <p>・医学研究科において、先端医学研究センターや研究・産学連携推進センター所属の一部教員が学生の研究指導に携われるよう、博士課程の指導資格審査を実施し、資格付与を承認した。</p>	<p>【大学院生の声を教育研究指導に生かす取り組み】</p> <p>教育評価アンケートや大学院生向け相談窓口の運用を継続し、大学院生の声を教育研究指導体制の改善に活かしていく。</p>

※セルの行数、幅は変更自由です。

項目	枝番	Plan				Do		Check	Action	
		1 取組	2 課題	3 到達目標	4 スケジュール		5 改善に向けた具体的取組	6 成果	7 次年度の取組に向けて	
					時期	内容				
C 特色出し	1	<p>令和6年度シート転記「次年度での取組に向けて」</p> <p>・引き続き、高度看護専門職教育課程の教育と受験支援を行っていく。 新規開設予定のクリティカル看護CNS教育課程についての広報を行う。</p>	<p>【特色を出す取組】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・カリキュラムを更新した博士前期課程クリティカルケア・周麻酔期看護学分野および新設した博士後期課程機能再生看護学研究分野について、広報する。 ・受験者にとって、有益な情報を見やすく更新し、本学の情報をよりアクセスしやすくする。 ・老年看護CNS教育課程、CNS共通科目の更新を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・老年看護CNS教育課程、CNS共通科目の更新を控えているため、滞りのない申請手続きが必要である。 	<ul style="list-style-type: none"> ・助産師国家試験を受験し、全員が合格する。 ・特定行為研修受験者全員が合格する ・専門看護師受験者および更新者が90%以上合格する。 ・老年看護CNS教育課程、CNS共通科目を更新する。 	4月	<ul style="list-style-type: none"> ・助産学分野の学生の履修が計画通りに進むように環境を整える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・クリティカルケア・周麻酔期看護学分野のCNS教育課程を開始した ・特定行為研修運営のために必要な人材、財源の確保について方針を検討した ・助産師育成、特定行為研修、CNS人材育成を各分野で実施した ・2名から3名に増員した助産師教育を開始した 	<p>【運営】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・CNS共通科目及び老年看護学の更新申請をJANPUに行い受理された（予定） <p>【受験支援】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・助産師2名（見込）、CNS看護師（新規：がん看護1名・5年更新：老年看護3名）が合格し、専門看護師の合格率は約100%となった（4名中4名合格） ・特定行為研修（術中麻酔管理領域）において、OSCE、症例実習を実施し、受験した全員(4名)が3月合格予定 ・特定行為研修において栄養に係るカテーテル管理（末梢留置型中心静脈注射用カテーテル管理）関連2名の受験者が3月合格予定 <p>【充実】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新規に設置したCNS教育課程であるクリティカルケア・周麻酔期看護学分野が順調に運営され、本年度2名修了予定 ・クリティカルケア・周麻酔期看護学分野の周麻酔期看護師教育課程の教育が日本周麻酔期看護医学会のプログラム（学会認定周麻酔期看護師）として認定された ・定員を増員した助産学分野が順調に運営された <p><到達目標達成></p>	<ul style="list-style-type: none"> ・引き続き、高度看護専門職教育課程の教育と受験支援を行っていく ・小児看護学CNSの更新申請を行う
						4~7月	<ul style="list-style-type: none"> ・CNS教育課程（共通科目・老年看護）の更新準備を進め、7月末までに申請書類をJANPUに提出する。 			
						4~8月	<ul style="list-style-type: none"> ・専門看護師受験者を支援する 			
						2月	<ul style="list-style-type: none"> ・助産師国家試験受験を支援する 			
						3月	<ul style="list-style-type: none"> ・老年看護CNS課程、CNS共通科目の更新認可 			
C 特色出し	2	<ul style="list-style-type: none"> ・YCU看護アルムナイ・ネットワークの活性化と修了生の業績を実態把握する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・YCU看護アルムナイ・ネットワークへの会員登録者数増のための情報発信が課題である。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教員紹介、トピック、エクステンション講座、入試情報を会員に発信する。 ・在学生、修了生へYCU看護アルムナイ・ネットワークの情報を発信する。 	随時	<ul style="list-style-type: none"> ・教員紹介、トピック、エクステンション講座の発信 	<ul style="list-style-type: none"> ・大学院内で独自の修了生の動向調査を実施した ・アルムナイ・ネットワークPJでの検討を進めた ・修了生の研究業績の報告ルールを検討し、それにそった調査を実施した 	<ul style="list-style-type: none"> ・アルムナイ・ネットワーク構築の方針を決定した ・アルムナイ・ネットワーク交流会を2回、開催した ・修了生の研究業績と動向の実態を把握した <p><到達目標達成></p>	<ul style="list-style-type: none"> ・アルムナイ・ネットワークの活性化と修了生の業績を実態把握する 	
					4月	<ul style="list-style-type: none"> ・オープンラボ 				
					9月	<ul style="list-style-type: none"> ・入試 				
					1月	<ul style="list-style-type: none"> ・入試 				
1	A2と同様	<p>【グローバル教育】</p>								

※セルの行数、幅は変更自由です。

項目	枝番	Plan				Do		Check	Action
		1 取組	2 課題	3 到達目標	4 スケジュール		5 改善に向けた具体的取組	6 成果	7 次年度の取組に向けて
					時期	内容			
D 共通 課題	2	<p>令和6年度シート転記「次年度での取組に向けて」</p> <p>・科目等履修生の情報提供を行っている。</p>	<p>【リカレント教育】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特定行為研修を充実する。 ・科目等履修生への開放科目の横浜市職員研修、附属2病院へ広報する。 ・科目等履修生への開放科目をアルムネットワークを活用し、卒業生へも開放する。 ・充実した専門看護師課程や特定行為研修、科目等履修生制度を広報し、受講生の増加を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・令和6年度、附属2病院からの公開科目の受講希望者が0名であったため、広報が課題である。 ・クリティカルケア・周麻酔期看護学分野におけるCNS課程の開始について広報を行う必要がある。 <p>・専門看護師課程や特定行為研修の受講者（大学院生）を確保する。</p> <p>・研究生や科目等履修生の制度受講者数が増加する。</p> <p>・横浜市職員を対象とする科目等履修生制度の周知を継続し、受講者数を維持する。</p>	<p>4月</p> <p>7月</p> <p>9月</p> <p>12月</p> <p>1月</p>	<p>オープンラボ</p> <p>科目等履修生募集</p> <p>大学院入試</p> <p>研究生出願</p> <p>大学院入試 科目等履修生募集</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・計画通り広報活動を行った ・アルムネットワーク主催の交流会を活用し、出席者に広報を行った ・パンフレットを用いてクリティカルケア・周麻酔期看護学分野にCNS課程が新設されたことを広報した ・横浜市職員を対象とする科目等履修生制度の周知を継続して行った 	<ul style="list-style-type: none"> ・横浜市職員の科目等履修生として3名が受講した ・センター病院より科目等履修生が1名受講した <p><到達目標達成></p>	<ul style="list-style-type: none"> ・横浜市職員を対象とする科目等履修生制度の周知を継続し、受講者数を維持する
	3	<p>・推薦入試、新設されるクリティカルケア看護CNS教育課程について広報を強化する。</p>	<p>【<u>大学院の定員超過及び未充足の改善</u>】※<u>研究科のみが対象</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・今年度から開始される学内推薦について、学部生へ周知し出願者を確保する。 ・定員充足に向けた研究分野の広報を実施する。 ・オープンラボを引きつぎ早期開催し、入試例題の公開を実施する。 	<p>【令和6年度の収容定員充足率が100%～120%以外の場合に記載。また、令和6年度の入学定員充足率が100%未満の場合に記載】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・社会人学生が多く交流の機会が工夫や相談窓口の周知が足りない。 	<p>【令和6年度の収容定員充足率が100%～120%以外の場合に記載。また、令和6年度の入学定員充足率が100%未満の場合に記載】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・博士前期（25名）、博士後期（6名）の定員を充足する。 	<p>4月</p> <p>6月</p> <p>7月</p> <p>9月</p> <p>1月</p>	<p>入試例題集のHP掲載</p> <p>学内推薦出願</p> <p>学内推薦入試</p> <p>大学院入試</p> <p>大学院入試</p>	<p>【令和6年度の収容定員充足率が100%～120%以外の場合に記載。また、令和6年度の入学定員充足率が100%未満の場合に記載】</p>	<p>別紙：令和7年度の定員管理と大学院進学率を認証評価共通基礎データ様式にて確認(データは事務局にて作成)するため本欄は記入不要</p>